

尾張名所圖會

附録

一

第壹十門 尾張名所  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會

尾張名所圖會  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會

尾張名所圖會  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會

第壹十門 尾張名所  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會  
尾張名所圖會





小治田真清水叙

天保年間所出之尾張名

所苗會文園梅居二人之

同撰也刊行之日文園者不

慚於心者於是獨作為斯

編年曰小治田真清水廿



名所圖會

附錄

義蓋取於屠張田增水  
之意云跗名所圖云以問  
于世余也嘗聞之延喜中  
貫之友則躬恒忠峯四人  
奉

勅撰古今和歌集而後

功之日貫之別撰新撰和  
歌集元久中通具有家  
隆雅經定家五人奉

勅撰新古今集而落成之  
日定家又特撰新勅撰集  
不知文圖於斯編上效貫

之定家之為身書以叩文  
園之魯壯兼告於覽斯  
編人

嘉永六年歲在癸丑冬十

月之者

尾張百竹為深田精一併書

凡例

萬葉集以來古歌にありけり諸國ノ勝地とて名所と云ひたりし一  
車既に久しく新古今集祝部成仲の歌ノ詞書に教長卿名所の歌  
と傳々傳に云と見え又 順徳天皇此御時堪能の歌人にみこせり  
るりりて國ノ景地百首此歌と云ふは是を建保名所百首と名に  
けり和歌名所の通稱ハ其頃より始まりけんればいふは  
風景多尺地とて歌にありけり所を名所と云ふはさういふは然  
小武百年以前より名所と俗地也混雜して居りて洛陽名所鑑江  
戸名所記等も近代諸國名所圖會何とて郷里山川名所普跡神祠  
梵刹人物產物に至りてり今事とて傳へて其書名に惟名所  
みと表す事ハ頗る留意告よりしん其傳習と今改めて益  
むいといふは依てきりて春江瑞齋梅居の三雅癖に我俗  
癖を合せうらひ當て精一先生鼓舞の助を得て當國風土乃圖

會と著りけりやして尾張名所圖會と号けり也扱其國會前編  
七冊後編五冊數年とて精密と尽すといへり又漏脱あり事あり  
是をむづの遺憾といふ

○深田香實先生天保四年より 公命と奉りて國志と改撰せり  
中尾義福と我も二人と又不肖自身あり 公命と下りて

彼撰書の補助とけりまうより同十五年ついに撰述成就一尾張志  
六十卷小田切忠近の地圖に献納畢りてされば其項八郡の内  
巡行も事ありて風去る時にも伺ひ知事と得より扱其天保  
のより冬より筆記し置けり又故の中より御國にち事蹟も今古

此奇談怪說等と抄出して八巻とて 画圖を加つて小治田之真清  
水と号く是則年異道之水のいさばら足筋のみを撰ぶる故也とて  
又名所國會に洩たふ事ばやうき集りては全く國會に拾遺り  
たり真清水又増水とも聞えて名所國會の増補或ハ附録とも呼ぶ人

りハ前件の遺憾も晴向心地と幸ひなり

○此編全部八巻のうち愛智智多海東海西四郡五巻と初編として名  
所國會に前編に准り中島羽粟春日井丹羽四郡三巻と二編として國  
會の後編になり

○名所國會は詩文和歌狂歌俳句等古今といへ近世現存の人作  
も多くろせけれと此編にハ百年以上の達人の作のみならず近代  
ものせひまれにハ述の作と引出せ高とせれや其ハ事實の

證跡とちんき詩歌発句等うてやむ事と得き信義と知信  
諸國ハ名所國會に尽りたれどもに画く所すくなくされと篠島日間  
賀島とてハ國會にりれを信真景と數十箇所あり且奇談怪說の免  
けりたつと描きて童蒙の玩覽に備ふりた多し其うち師長

公陳元寶とての画ハ名所國會にありといへり其趣はよくた  
ひこに画りて師長公僧形の真とて一陳元寶の頭のみは實

に非人の風俗にて四十二國人物圖說等七繪によく合つりうふた  
 ぐひすくぢくひ且亦清正朝臣の像野並に梅の如き由縁名所圖會  
 ころふまは此編に惟画のみをらけ或ハ事實と畧抄く圖の上に  
 書上付るも皆諸國名所圖會の拾遺附録等比例也  
 ○神社寺院に持傳へる古文書とてこつてつゝくふは原書に字体  
 何まゝ古雅く其姿を失ふるやに縮寫する事あり故  
 小令様の書体に改め寫して其父義のみたかまふと要し諸君子  
 是を足りて抄下へ

文園 岡田 啓一 侍



小治田之真清水卷之一

目錄名古屋部

- |                        |                        |                        |                        |
|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 尾張國印の圖                 | 鏡魚の古圖                  | 古小判金の圖                 | 尾張國の地理                 |
| 蓬左基盤刺圖                 | 小蓬菜の名義                 | 柳生鐔来由圖                 | 産物の品々                  |
| 西鐵御門外 <small>同</small> | 天王坊後園圖                 | 牛玉寶印                   | 内府端の邊 <small>同</small> |
| 茶屋町                    | 剛象通行 <small>同</small>  | せり池                    | 杉之町 <small>同起</small>  |
| 櫻林舊趾 <small>同古</small> | 銀治政常                   | 鶴重町                    | 天蓋町舊趾                  |
| 籠市                     | 尖森庚申堂                  | 白華園信阿墓                 | 信長公作繪馬                 |
| 安用寺                    | 画像大達磨 <small>同</small> | 橘町                     | 七寺 <small>林泉の圖</small> |
| 松原海道の跡                 | 西小路妓樓跡                 | 那古野孫五郎                 | 盗人森 <small>同古</small>  |
| 俳諧師横松                  | 泰雲寺 <small>同</small>   | 尼頭義次塚 <small>同</small> | 道場法師 <small>同故</small> |
| 御伊勢川 <small>同由</small> | 榎木町                    | 大矢氏城跡                  | 秋景權現堂                  |
| 塩川伯耆守                  | 土方河内守                  | 忠孝堂                    | 堀留                     |

御園町

川村随見宅跡

醫學館試問同

長榮寺同

相應寺 洪鐘銘

陳元賢寓宅園

少子部連の墓

久遠寺

光蓮寺

道園屋鋪

晴明の辻

四子出産の事

東序瑞蓮同

歌塚

善藏寺

梅屋寺

御蔭園同

七曲町

學館起源明倫堂

稲島普請場跡

隆正寺

坊の坂

九十軒町

遍照院

草詠女神の堂

大黒舞同中

辨才天社

觀音拜參の園

蔡師寺

法然寺

天道社

小牧町仇討同

汐見山

本住寺

園教寺

操芝居

埋藏發售日

尾張國印

天平二年大稅帳及六年正稅帳

集古十種曰

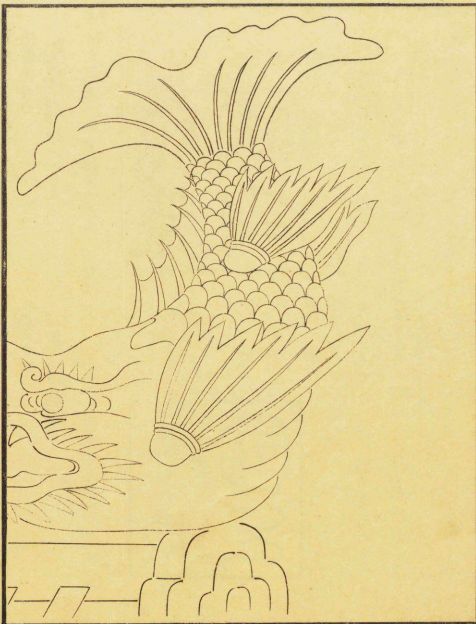
尾張國印

天長二年十月廿日尾張國司輝野印



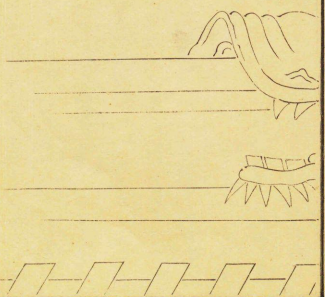
右兩様の古印ハ揃一ヶ所にや貞觀に又新らしく鑄て當國司(臣)リ

キハ三代實録に貞觀二年四月廿五日己新鑄印一面賜尾張國と尾ナリ



全身量全

總高 九尺  
 胴高 三尺  
 胴廻り 七尺  
 尾巾 六尺  
 腰大 一尺 腰中腹  
 幅 一尺 腰中腹  
 下幅 一尺 腰中腹  
 上幅 一尺 腰中腹  
 尾巾幅 一尺 腰中腹  
 肥後守殿御注文  
 右表は口の土屋の注文  
 一に足すなり



ともり人ハさうなき蛇トナカうらま  
 ころのいふあふまてそ足新

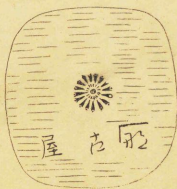
一傳天宮の御道よりそまじりて  
 流少流を吐絶まはこええしなり



金銀圖録

尾張國那古屋小判金

重廿四匁



同上津島小判金

重廿四匁  
金位中ノ下



抑尾張國ハ往古より伊勢國中海川隔たりて陸路行へずは舟を往来  
 安し以東國非常の警衛の備ふに便利に地勢を以て關所を置  
 之を三關の國近江伊勢美濃と三關の國を以て造坂也等しく又太宰  
 府と異國の要害の爲に置けり同例の舊制あり一は續日本紀  
 和銅元年三月丙子徙四位下佐伯宿祢太麻呂爲尾張守同月乙卯勃  
 太宰府帥大貳并三關及尾張守等始給僱仗其首帥八人大貳及尾張守  
 四人三關國守二人其考選軍力及公麻田並准史主と又之同紀及び類  
 聚國史に和銅二年九月己卯遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二  
 道檢察關制並省風俗仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓尾張守從四  
 位下佐伯宿祢太麻呂近江守從四位下多治比真人水守美濃守從五位  
 上望朝臣麻呂當田各一十町穀二百斛衣一襲美其政績也と云ゆ也  
 其後徳代と給ふに容易に予は儀より甚稀なりと太宰大貳と同一  
 其負四人と尾張守に給ひ云々云々に比地警固嚴重小傷へ

子氏（きたためなりす）て要害のそめくハ山海の險難宮によりて設  
けられたる當國に伊勢塔なる馬津の渡り難所のたやすく往来  
しつゝとて三関とむせり三國を以て定めらるゝ也又罪人配流  
る國と山海のなやと主意に罪の輕重より遠流中流近流の三  
等遠流訪伊豫馬中越前安藝馬遠くは吉野郡百舌川同くは吉野の  
國名子等置たりては尾張其定めの外も國なれども古來より  
當國に配流せり人の多し全く馬津の渡り隔てり  
しりふらなり一扱名所國會の馬津古駅の条に日本後紀及び尾張  
國解文等と引きて其時代のさまじし置れば解文と殊に畧書  
しれば古雅の旨趣と失り故に全文と再びしに志す以其三十  
箇條のうち十九條日本文左のよき  
請被裁斷依無馬津渡船以所部少船并津邊人令渡煩事 右從船故  
者其誤誰有濁水以泥者其處何帰國內之事厄當任判吏獨猶難通因之

近則泥途遠只津邊可置渡船等也就中馬津渡是海道第一之難所官使  
上下之留連度也差大勢之船被買渡者為郡司百姓何事煩番亦主用於  
官帳都無其心兼不蒙官裁者若致不意之恐故其由何者編少船以渡官  
使之間擬細稅以漕海路之日或風黑吹破或白浪忽起任身於鯨鯢之膺  
曝骸於鯨鯢之腮者缺允當任守元命朝臣不知其浮沈何謂因史義望請  
官裁且渡舟航且越（江海矣）

右の解文ハ 一條天皇乃御世從五位下藤原元命朝臣。尾張守をり  
時任國三ヶ年之間私曲非法乃所行甚多。ハ郡司以下の百  
姓苦ミに堪ハ其惡事三十一箇条を以て京都に言上。たも訴狀  
たして正中二年八月十一日乃古寫本なり以朝臣。不治非法の事ハ  
日本紀畧小永祚元年二月五日丙辰定尾張國百姓愁申守藤原元命可  
被替他人之由。とんく百鍊抄に永祚元年二月六日諸卿定中尾張國  
百姓等訴申守藤原元命非法事と志向 北山抄と尾張守元命不奉

蓬左の御城下  
 甚盤割



繪

もろこりた  
 甚盤割  
 行かせん  
 町ごと加う  
 職ごと加う  
 たり



公よて不度見稱よりのぬ節あるよるる其外地蔵矣たつ記云元  
 命朝臣尾張守にて惡業あくごうとなりふふ一いはををねたる解文のの赴き  
 小く合あはてて經臣つとむらひの子こて英田防守源致えいけんすげんぢきのなりなり志こころなり  
 小蓬菜こぼんさいの義梅華うめ無尺藏翰林五願集ごがんでん等らににあり五山ごさんの学僧がくそうも  
 が詩文しぶん小尾張こおえの替文字かへむじと蓬菜ぼんさいとらじりりひ蓬菜ぼんさいととりりもか  
 多心たしん八住古はちすまりのりはは一いた無田むでん地ちとよりだが鳥とりととひたさりりりに  
 振ふるまり神社じんじ若異わかに稱なづ日本にっぽん傳でんなをどうも近代しんたい著撰しやくせんの数すう十部じふぶの書しよても  
 少すくて皆熱田あつたと蓬菜ぼんさいと稱なづずるりいりりね其異地よちの縁ゆかり八斐田はひでんと亀かめの  
 ちちらとて地脈ちまく長く北きたの方にへけき名古屋なふるやの御城ごしろ地ちまて縦横じゆうごう  
 屋やく一國いつこくの岡おかまよて亀かめの脊せのてくままりり蓬菜ぼんさいのうちちももたれ  
 り故小御城こごしろと蓬左ぼんざ城しろと稱なづず猪子しよこ石村いしむらの蓬菜洞ぼんさいどうままて皆其地みなは  
 たなり南なんと亀かめの頭かぶたに表あらわす北きたと亀かめの尾お小准せうじゆんけけららや亀尾山かめおし天王てんわう社しろ  
 龜尾天神社かめおしたんじんしろ御城ごしろの根廻りねまわりに鎮座ちんざせりりけけ亀形かめがたの丘かみ味あじははく

とと那古野山なふるやとしりりり慶長十五年けicho引ひならりて町並まちならひくく落おちりりよ  
 己今おのハ蓬菜ぼんさいのうちちももええば其時そのときの童謡どうたうと音ねに聞きえ那古野なふるやの山やま  
 ととごごままややななりた肥後ひごを衆しゆううやや一いは是則これなり御ごららり外南ぐわいなんの正ただ  
 面おもてりて名古屋なごやしよの甚盤割じんぱんわりとて町まちならりすすて甚盤割じんぱんわりといい町造まちぞう  
 も諸國しよこくよよと多く又日下ひげ舊聞きゆもんといい異國いこくの書しよに大明門だいめいもん前まへ棋盤天街きぱんてんがい百  
 貨雲集ひやくうんしゆとええて和漢わくわんとて其例そのれいするる配はいといいくとももりりき  
 當あたり御城ごしろ下したならり其地そのち廣ひろく四方しやう低ひりて中央ちゆうわう高たかく平坦へいならばばは  
 一いく棋盤きぱんと居ゐる其上そのかみに目めと盤ばんりおお如ごとく縦横じゆうごうの條理じゆりの正ただ一いき  
 世よにののげげききなりりび岡山おかやまの異地よちととややてて斐田はいでんと蓬菜ぼんさいと稱なづ  
 一いは尾張おえの國名くになと及およびびて小蓬菜こぼんさいといい三字さんと設だけけけられりな  
 るる古来こらいより蓬菜ぼんさいと尾張おえの地ちとて作りつくりたる古詩こし古文こぶん甚多しんたふ  
 と證據てんこのをめに抄出しょうしゆしてままに志こころり事こと左ひだりのてし



柳生鋸の来由



江表韻集

遠守古院被秋催岸上抹松聽戶閑瀟砌浪紅鋪落葉遠階嵐綠拂寒苔  
孤舟棹影穿烟去晚寺鐘聲澆水來此地卜鄰非俗境龜山便是小蓬萊

蘭坡

南嶺寺文惠年中啟

翰林五言集

寄尾之中谷侍者  
秋風取別意無寐夜；殺殘官寺鐘聲作蓬萊都水藍紅輝霜葉碧霜松

村巷

次句寄尾陽人

一躡仙蹤采藥人問懷望幾朝群近來欲問徐郎信雲傍蓬萊海上飛

寄尾陽故人

同

海山佳處是君鄉咫尺仙家日月長却恐蓬萊水清淺麻姑西鬢也應霜

亘竹

相國寺舊永年中人

此去君家到者稀風塵京洛滌人衣笑吾一念五丁力欲到蓬萊夜半飯

招竹圃留滯尾陽

同

默數天涯三日程秋風攪唾出都城離愁如海思君夜應是蓬萊涯又清

寄尾州殊伯

瑞岩

十一

莫道蓬萊非世間東遊今日待君還安期若授長生術寄與刀圭慰暮顏

送人歸尾陽

同

却老無方暮髮明塵中落拓歲崢嶸蓬萊到日有回使分我紫芝三四莖

送慶甫老人之尾州

同

客舍長安歲月仙遊万里憶蓬萊離愁可忍雲飛夕柳柳無枝只折梅

蓬萊有二美少年其諱曰齊粟性聰利嗜學攷；人命曰洞上異

苗也癸巳孟春之初溘然而逝矣尤音山田郎義溪侍者平素講

忘年之交以故介其逝云云因賦一章奉呈義溪侍者助哀云

天隱

建仁寺文惠年中人

蓬萊聞說是仙洲豈謂令狐短世悲花笑鳥歌春未半風吹暮樹雨知秋

桂蓬萊香

明應二年春丑正月六日

万里

葦原鄉有小蓬萊祀子祠堂春蝕苔若對御前錄沈水長生連理定香材

花後遊天寧

余寓尾州又遊天寧看石亭

同

舊入蓬州鞋踏煙飯未綠暗石亭前去不見今春又可恨花無半日綠

日本蓬萊尾陽太守野州賢君去歲冬之季純之觸微疾身在床

褥廣洛著域扁域相聚竭匡力雖然絳雲丹飛霜散亦曾不能治

之君之性命既是懸絳耳齊此辰從卒安將國家氏族無貴無賤

流悲法云云就中一家棟梁小笠原城門即忠重公不二厥心欲

重履於君者必矣嗚呼忠哉孝哉一日不勝悲之云云天夫感之

乎忽平復如本云云忠重公孝心天下無其隱兒童誦之走卒

知之云云感歎之餘整記一篇云云以寄城門即足下云

鉄 山 名宗純元 和年中殿

山林風日集

聞說重君輕二命忠臣天下不公誰洛陽万里蕪無履花亦知名鳥亦知

遊尾之小蓬萊護海筆記詩蓋摘古真人之所謂杖頭雲水三千

恒留文集

世間榮達眼中埃方外真遊心上仄弱水誰言三萬里不知身重有蓬萊

寬永中子紀行 是夕雨降到翌朝三月二十五日發田宮

執田日本小蓬萊道士曾尋妃子來神託製花似留客一枝帶雨落還開

右二百五十年以徃乃數首の詩うけり以藤田のゆゑ蓬萊とすゆに石

産物ろ品、○吳服物 尾張うてゑりて綾錦と織り習ひ車續日

本紀の和銅五年七月の条に又之延喜乃主計式に尾張國より冠羅蕃

薇綾等ろ品と貢獻せりふし志はちちハ綾羅錦緋の上品なる物也

其以下の絹布絲綿ホト當國よりきてまつりて六國史とて之を延

喜式江家次第等數十部ハ古書小足えくゆちけて尽しつゝ絹布此

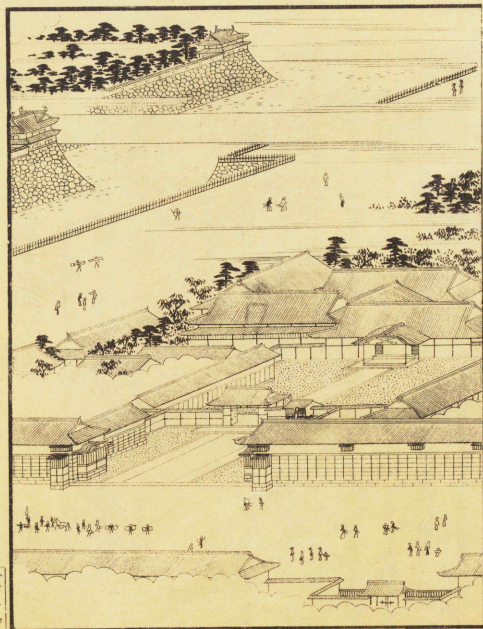
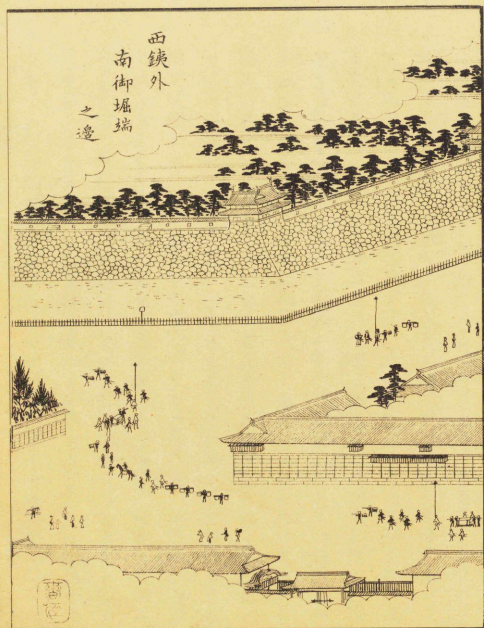
國産珠に多々見せむハ品類少く長絹白絹八丈絹細疊ホ付

四五種のみなり令名古屋町ニ此吳服屋太物屋にて賣買する絹布ハ

其種類甚多して彼いふ一ハ百倍たり又木綿問屋ハ國産の白木

綿織綿木綿ホト他に賣渡す是と諸國よりて尾張もゆくと稱し彼天下

林羅山





小名高と河内木綿真同木綿結城木綿等より作る名産なり  
○武器の類 延喜式兵部省諸国器仗のうち尾張国甲六領横刀十  
六口弓四十張 征箭五十具 胡箭五十具 中百ふ如く 往古より國魁  
の是て今猶とれらる職人甚多し 尾張胴はまじふく 堅實なり 世に  
桶がハ胴と称す 木下藤吉即達江乃松下某へ僕たりし時 主人の所  
ら、めて桶がハ胴と買求めに 尾張より來り 其代金をもて 織田家の扶  
持人に抱られて 終に遠州より 才主人松下に 不實の無沙汰に乃  
しといひ傳へ 其名器今猶其職人ありて 明孫と名のれり 其外馬具  
屋を數十家あり 鉄炮張、芝辻 因友等の數家皆良工なり 鍔鐔ハ柳  
生鐔と名物なり 裝剣奇賞に 尾州小柳生鐔と稱す 往日柳生某といふ  
術者の好むを數十枚乃鐔ときたしを是と白に入て力に よる留て  
けり 其破き毀へる物と除き 站なき物を撰び用りしといひ傳へ  
る 或士よりくわて 價を惜まらば是と求められ 在其名わりく 弘

て競ふて是と賞へ 今名古屋と云ふ行と上の方より其子といふ  
多くきこえ原と云ふもの 其外山吉戸田等ハ尾張鐔ハ萬寶全書不  
述世と上工ありて日置けと稱すハ其製作すられたり 其餘の諸  
品名古屋にて製作せざる物なり 刀劍ハ珠更をくんとし 後乃別奈  
小志乃寸合せなり ○雜器 大小の釣鐘 金燈籠 佛像佛具  
類 鍋釜 茶道具等よりくれば 銅器 鐵器の鑄物師ハ 鍋屋町に 数家あり  
高水野氏といふ者 殊に舊工なり 簞笥 長持 襖衝立 障子 膳梳箱類  
塗物彫物の細工 雜人形 曹人形 扇子 造花硝子 細工 錫引等に 至る迄  
百工諸職ハ名人手と尽し 堅實 精密ハ製造目と稱す ちりちりたる  
り 間屋ありて 集めて 諸國に 運漕ハ 佛檀造ハ 七間町筋に多し 其制作  
木品と撰ひ 細密ハ 彫物手と尽し 堅地ハ 漆塗に 黄金の箔と多く 甚  
なる板金と振ふに至り 其價の貴きもの押ししるなり 遠碧軒記に  
禁中の黒戸に 御佛檀の繪所の者子澤一國に 蓮華とかく 本尊は

代々御尊崇の佛と安置云云と云はちり 帝皇乃御佛檀す如ひ意  
畧して只蓮花と画けらるのみ也近來俗間乃佛檀の結構じうに万  
倍せし事なりと初るべし 辨斗ハ中下司と為家より推衝ハ廣小路  
に守隨氏ありて近國邊郡までゆきし 自鳴磬ハ制作珠と奇なり  
時斗師津田氏乃先祖ハ京都に居住せしむる朝鮮より始めて渡  
りたる 自鳴磬此年へて破損せしと津田氏 公命と奉り修補を加  
ふりて其機轉と工夫を得しありたふ一基とゆくり漆へあはじや  
けに献し、ハ厚き御褒賞に預りて慶長十二年清須にうつり其  
後名古屋に移り日本よて時計製作の権典とし、ハ一 鎮ハ俳調毛  
吹草寛永十五年乃尾張名物のうちに南方鎮とるく尾陽空夕帳寛文中  
乃柳の夕に 南方の風ハ旗ハ柳葉伊人と云はせり 諸葛孔明  
後出師表に思惟北征宜先入南故五月渡瀘深入不毛と云ふの南方  
不毛によりて名義のゆゑ塩尻といへり 名所國會にちせ並にける

説くは甚たう一り正親町公通卿の雅莖醉狂祭に鑄是南方強といふ  
狂言とる中庸の語よりてけぬきのつよはゆゑより 去はせられた  
る其名の遠国より高きと知るべし 那古屋金よる津島金ハ逆藤  
守重ハ金銀圖録に足えり其小判形の古雅なる事前の圖とて知  
るべし 一つの頭通用せし金ハ今ハかりうべし 名古屋帯ハ唐糸乃  
ち紐と幾重と巻て帯とゆふ物よて肥前の名護屋より仕出りける故  
なこや帯と名づけし 骨董衆にいふハ至當り説を然尙に  
玉滴隠見の慶安四年の條に當世ハ尾張ちよひの二帶手と云ふ  
人ハいかりのよびといふ落首とのせしむる 其狂哥の意と云ふは  
や名古屋帯と尾張うちよびといひうべし 二百年前  
彼帯れりやも頃 御當齋よりも組とくのて出りける江戸人  
是尾張れりやも心得てかくハハミハちを然し外も其證  
ありといへども忌諱の恐れちるにハハミハちり 筆ハ

名古屋造りと北葦や稱よ南都及び有馬うまの仕入しに葦あしはまらん  
事遠こととほきんともろふの高たかはうぶさうぶさ延喜式齋宮寮諸國調庸雜  
物のうち又民部省年料別貢雜物のうちに葦尾張あしお二百管ひゃくくだんと志しはせり  
ぬりき産物なり 元結水引紙煙草もとむすみづひきし入尋いじん中下押切堂町なかつかきだうぢ造舟  
車くるま野の茂も遠とほ國くにに運送うんそうもる莫な才さいたり 晴雨はるあめ用もち具ぐ笠かさ縫ぬい牽ひ張はり  
草履くわだ木履造等の諸職人良工多く婦人の足駄類あしだるい漆塗しつぬに天鷲織あまじうぢ  
ふひひ真田組まんだぐみ結むすれ緒いととつけ善美ぜんびとげくくひひ三都さんとの仕入しにに同一海  
人うみ藻芥もがひに塗足ぬあし駄准だじゆん杏あん仍いづ入用いづり之しとえく長門本平家物語ながとほんへいけものがたりに南みな越この大  
衆おほしらりりた小歌こたとうきて山門さんもんへ送おくりりななと志しはせりて歴れき  
乃官僧のくわんそうななとと番ばんに准じゆんじてよく物ものををてて延年えんねん賤婦せんぷの日用じつようの料りょうと  
次古今つぎこゝろの変改へんかいと知るしるへく〇飲食おんじの類るい酒しゆ御城下ごじやう及び智多郡ちたぐんの  
造酒ぞうしゆ影かげく其餘そのあ諸郡しよぐんにに多おほくくりりててししんん摸寄もけり他國たこくへ  
送舟そうふね塩尻しんじりに去元禄十五年閏東月しよげんごねんうんとうげつ仲なつににりりて諸國しよこく醸酒じやうしゆの斛こく敷しきを記しさ

一一む封内むふうない尾張おひの神かみ辛か巳み酌家しやくけの耐酒たいしゆ通計つうけい十一萬四千九百六十石餘じゆん  
午うまの通計つうけい八万四千零七石餘はちまんしよせんしちじゆん是壬午五月所録しにうまごごごなりなりこれこれ京師きやうし南みな越こ難  
波なみははずずりりいいここ諸所しよしよの都會とくわいと記しりりは左ひだりより多おほりりなむ  
宜哉いさい半はんと減へんりて釀じやうすすべきべき令しやう強かぢひひりりと志しはせりし中なかつ古こ以  
來らいの事こと之し往古わうこ猶なほずずくくわわりり延喜式えんぎしき及び伊勢太神宮いせたいじんぐうの古記録こきらくとも  
小尾張酒こおひぢやうしゆ貢進きんしんの車くるま志しはせりし天文十三年宗牧そうぼく東國紀行とうこくきぎやうの  
三河國さんわこく新城しんじやうの菅沼すがのうま氏うぢに旅宿りよじやくせせ糸いとに旅宿りよじやくしても別わかのかかままととく  
數寄かずよの座ざ友ともへむむここなる旅りよの具ぐともともここハセハセやうて風呂ふうりよヲ食たらら  
ぬ雁かりの孫まごの料理りやうり尾州造おびすぢやうぞうの名酒なめしゆ路次じよじ不通ふとうの時とき分ぶん奇特くせつのものなりなりと  
ここけけららりりてて尾張酒おひぢやうしゆのものと知しるるへへ赤味あかあじ嗜しゆ是こゝまま甚おほ多おほりり  
大豆だいずを焚たきに造ぞうりりたたりりて年月ねんげつと多おほく経へい経へいととりりてて其味そのあじはは珠たまに厚あつりり是こゝと他國たこくととハ  
変へんりり或あるハ紫色むらさきいろとなる溜たまりりてりり其味そのあじはは珠たまに厚あつりり是こゝと他國たこくととハ  
尾州おびす乃なりぞとと新しん張ぢやう樂がく記きに河内味かふちあじ嗜しゆと名物なぶつとと古今こゝろ著聞しやくわん菓下くわ學がく集しゆ



天王坊  
後園



晉

等に南都の法論味噌らず。味噌の事、七十一番、聆人歌合、小  
とわ、ろ、み、ぢ、う、ま、と、み、如く諸國に名物の味噌多けれど、其  
製法薄うて味は厚う、次獨り尾州味噌の陳舊の仕入、て強塩  
たれ、バコ、は、あ、ま、ん、十、安、う、ね、食、喇、れ、胸、腸、を、む、り、き、滋、補  
り、功、能、等、他、國、製、に、ま、り、ま、り、を、葉、種、ハ、延、喜、式、典、茶、寮、諸、國、貢、進  
年、料、雜、茶、の、う、ち、に、尾、張、國、四、十、六、種、の、を、て、諸、國、の、貢、進、に、引、く、ふ  
ま、は、品、類、甚、多、く、其、う、ち、に、ハ、昔、茶、廿、二、斤、前、胡、廿、斤、干、地、黄、四、升、桃  
子、四、斗、な、や、斤、目、秤、目、の、多、き、物、も、あ、り、て、惣、計、夥、し、き、茶、種、と、り  
む、う、朝、廷、よ、て、尾、州、産、の、茶、品、を、用、ひ、後、り、る、専、ら、め、り、一、丸、之  
然、尙、に、今、名古屋、の、茶、屋、屋、も、賣、所、の、品、及、び、医、家、に、用、向、処、す、て  
唐、物、と、し、め、靈、藏、の、品、及、び、和、國、の、産、も、遠、國、他、國、と、い、も、と、名、産、功  
能、の、物、と、の、み、撰、び、て、尾、張、産、の、品、と、目、付、る、至、而、少、な、一、實、に、古  
制、に、た、ま、と、い、ふ、一、

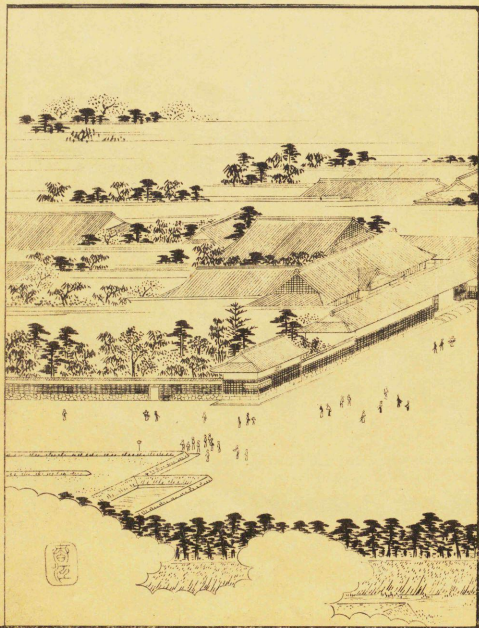
西鉄御門外邊

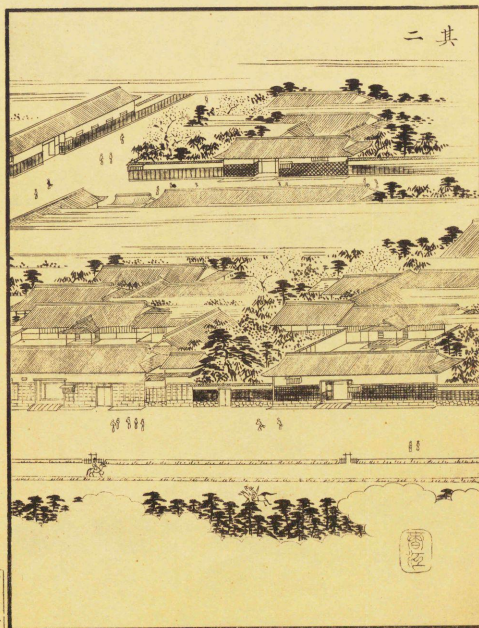
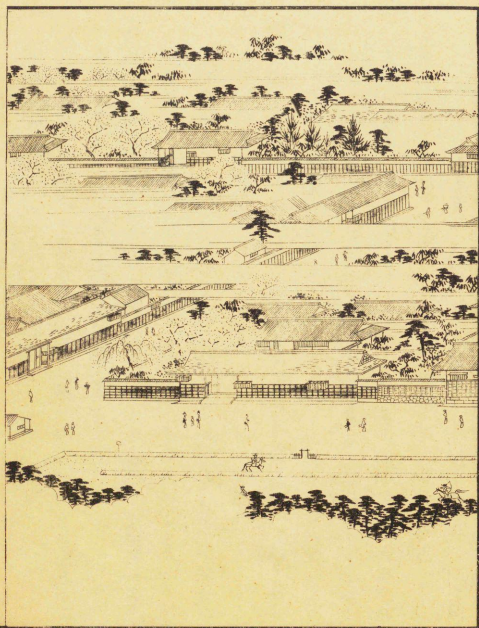
今川氏豊の居城の時も此邊に大手門あり

牛王寶印

三之九天王乃生王守護神符、紀伊國熊野の牛王と稱じ

起請文の罰文と云々、む、白、料、木、に、入、用、此、時、ハ、天、王、坊、南、の、坊、に  
て、授、け、り、請、く、閑、室、瑣、談、に、牛、王、ハ、ハ、セ、ウ、ハ、す、神、の、守、符、の、上、包、に、生  
土、と、う、き、た、生、の、字、に、下、り、一、畫、と、土、ハ、字、の、上、に、つ、け、て、ハ、人、の、や、り  
そ、う、り、牛、王、と、ふ、名、ハ、出、来、し、も、う、土、に、お、り、け、し、と、熊、野、ハ、伊、弉  
冊、尊、よ、て、人、倫、を、も、と、く、生、土、の、御、神、と、稱、す、ハ、牛、頭、天、王、と、御、符、内  
の、惣、生、土、の、御、神、と、い、ふ、御、土、も、れ、出、心、も、出、し、も、ち、も、皆  
人、思、ひ、の、さ、れ、い、も、牛、王、と、ハ、尊、稱、矣、威、は、は、ち、け、ち、な、く、た、事、を、  
牛、王、經、牛、王、儀、軌、を、し、古、經、典、も、な、れ、ハ、中、古、出、来、き、名、に、な  
ら、び、閑、室、瑣、談、の、説、ハ、い、い、く、信、し、こ、う、其、う、ち、牛、王、生、土、と  
同、い、う、ち、の、文、字、よ、て、世、に、守、り、と、な、り、流、し、ハ、い、い、く、め、て、た、紀、奇





遇なり因に天王坊後園の林泉と云に  
一覽と云なり

内片端 むう今川氏豊居城の時ハ邊と今市場といひて高人の

家居と立伴ふ今之姿とは基たういふあり

茶屋町 御兵衛所茶屋長以第宅ありて代々居住する故町の名也

以茶屋ハ中島氏江戸の御兵衛所と同家よりて由緒れすれより  
を世に如きとく王海集板行本 明暦二年のにを月の祭夕のうちに 茶屋と

よ人ののせよ

たづてふん代、茶屋の望月秋

喜多氏  
直能

と云より二百年以前もかく如く代々と稱していふ茶屋より

一田家なるを和名一表門脇の物見長屋の結構のさうと諸爰

うこれ屋敷のこむより異國人或ハ異國の珍敷等 御城下通

行の時ハ 高貴の御方御忍びうて此長屋より御才見控ハされ

と云又屋敷内に稻荷社有り毎年二月初午の日に北の門を開

きて諸人と参詣せむ遠近の人羣集して賑なり茶屋町ハ東の

長年中京の銀座後炭店三郎通ひ所居し金銀と両替子向者數人

清須よりうけ住しあり此町の名す今ハ退轉して平田屋といふ

替屋町のこれり其東のつくぢ富原町も同時に清須の京町とつせり

又茶屋町の西の方大和町ハ 御城御營業の時大工棟梁中井大和住り

御門近き本町の左右にありて御屋敷の最初に建れん此に御城内の親

馴象茶屋町通行の事 享保十三戌申年中京人來朝 廣南産匠

二頭北七歳と大船にのせ來り六月十九日長壽寺善寺乃唐人旅館

小到着に板岡東へ牽來れと公命と下り落り 此象食物相應せり

ふうにて長壽寺を病驚くれば 牡象一足と貢獻し翌十四日酉

年の春長壽寺を榮へ江戸に到り五月十五日此名古屋と通り

也象の性人乃高聲高笑いふに嫌ひ鐘太鼓亦乃音に驚き牛馬の形も

を恐れ甚怒り悩むよりそれら此障りと速急し扱ふに巧む

中兼日御觸りしは十三日起宿泊十四日稲葉宿の春清須宿

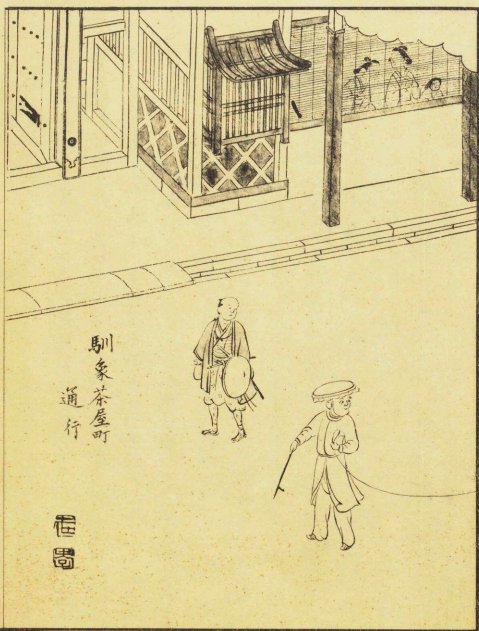


乃泊十五日宮宿の各池鯉鯽宥れ泊りまて路傍に牛馬とて置り  
諸人いや静うに見物たりしを享保板本に象志にこの牡象  
七歳頭長廿二尺七寸鼻長三尺三寸背高五尺七寸胴圍一丈長七  
尺四寸尾長三尺三寸と見え雄者兩長牙あり頭廻すなり口  
ハ頤に隱れ運動重象とて用ひ一軀乃力皆鼻にあり鼻端甚深  
閑闊く物を取内中に小肉ありて夾み取る芥子粒といへども亦拾  
ふ一毎に鼻を以て物を捲く喰ふちり飲水も亦鼻を以て捲く  
象の性、人に馴れず使制すに必鉄の鉤を以て象奴其頭に跨り  
鉤を以て使に進退前却自由となし云と云ふなり食物ハ芭蕉葉  
竹の葉ホも喰ひしむ室町將軍の時異國より黑象と獻  
るよりゆき元年代記にも見え若狭國今富名領主次第に應永  
十五年六月廿二日に南蠻船着岸帝玉より日本の國王へ乃進物生  
象一疋黒云云と云ふ又孝亮宿祿日記に慶長二年丁酉七月廿九

日太閤有御上洛自大唐来象禁重江被懸御目云云世口洛中人も象見  
物云と見え又のふ秘記に文化十年六月廿八日阿蘭陀船長等に着  
岸小象と獻え長寄奉行遠山某台命と奉り本國に差戻りしと云ふ  
よりより外も象と異國より獻進せし事希く誠に珍らしき壯  
觀也いと云

抄めき 毎年四月十六日乃夜本町通奥店筋乃御祭礼前夜のまう  
けと足むせんくと貴賤の羣集夥し元和の頃よりなりこゝ古習よて  
其賑ひを俗にそのまきといふとめくハ騒くといふ古語ちり袖中抄に  
萬葉云まきすといふ友の勝になくまきむ心とあらん我をうけしき  
せめくハさハく飲もさう夫木抄に弘長元年中發御親王家百首  
又うきもりやとけきハ合もこうとてそのたにマコおはしり  
推僧正公朝と見えり

杉の町 本町二町目の南ちり横町ちり 元名古屋の軒陌ハ南北へ通り



と云松林抄に阡陌以東西為縱阡以南北  
為橫陌と云古制ハ及一たり  
高岳院ノ門前より堀川まで其  
長きハ東西半里に過たり又長堀筋より駿河町までの南北の武士  
町と堅杉の町といふ是又甚長一其縱横の辻れ邊に富士淺間の社有  
りて境内殊に多く神木の老杉數十圍ありて世にゆづりき其樹は  
更々れハやく町名にと云ふありと松平君山ノ著書に御城御造  
營の時以地淺野彦の普請場となりて假屋と建られりもさきより  
りて彼大杉と依りけり谷と觸むと云る者忽ち問絶て地小作  
けきハ神慮に惜まを落しよと怪みりれやとて止むべきにあり  
ざりたれば御評議ありて淺間社と巾下に遷座し奉り杉ハ御役  
ひになりよふと志存せりすて當ハ杉樹の生ハ玄安と地ハ也り  
即高屋村ノ大杉春日井郡内津村の堺杉同部田村の大杉ハ其外八郡  
のうちに名あり老杉野愛ありとも多く松林と云合ハま  
古事記にりて相津の二保杉もその代りありて今ハ御城の東北  
ニ杉村といふ名の人のこり或説に實平聖田隱居にりて日本武多  
乃御脚に麻種藏手波里と云りたりよまきハ真杉の普便て杉ノ尾張  
の名物ト云枕詞によりたり落しよと云ハり依ていハや物

彼杉村ハ御普譜の料に用いらりたり一殘材の所とて其  
是れ武家に持修神代の古杉と稱し器物に造らして歌山人の實  
に古雅なる珍器なり當町本町の辻り西の方殺町の白古衣類高ハ  
華ハ江ノ新橋日影町淺草柳ノ子京都五条鳥見建仁寺町  
大坂難波橋高屋橋木の名と傳へて古手店に売るなり  
岳櫻林舊趾 小椋町天満宮れり殺野と云也 御遷有以  
前ハ那古野山の裾野に龜岳山方松寺ありて其境内境外甚廣く大和  
乃芳野に鬘髻なる椽林なり鎮守天満宮の社の側らに大樹と  
云ふハ花の頂ハ見物の人多く中ハ不行義の昔なととりの  
中見えて慶長四年九月九日清須の城主福島正則より遊山見物人乃  
才めに制札と建られたりて其古制札と今に万松寺に所持せり  
る珠古雅なり二百五十年以往の風俗と云ふハ其箇條の  
うちに一當寺山内において殺生の事一見物數畝尺ハ并うとい  
の事一見物衆ハ弁當の事ハ云々なり三味線ハ



伯耆守信高河村 信濃守貴道源 丹後守壽命藤原氏孫元 肥後守光代州名五郎

泰名殺人をりせしり

鶴重町 むう 清須に住ける三左衛門といふ鍛冶太神宮と信仰し奉

慮く伊勢に参詣しつらつら伊勢御夢想に鶴重といふ名を獲たりし

小刀と作りて又の上に鶴の紋と彫付たり其小刀名物とちりて世

りてとやそれ住する新町といふ名も鶴重町と云はれり

と名慶長年中こゝに移りて元禄元年三月高貴の姫君の御名

にせりつりて本重町と改りて天保五年九月より旧名に復して鶴

重町と改る

天蓋町舊高趾 むう 本町と長者町との間に廣小路あり蒲焼町まで南

北小径ありぬきたら堅小路ありて旅宿屋町又天蓋町ともいひつり

て天蓋町或は天冠 抱女屋居酒屋不建ち並いさ其也に扇風呂せい

名高き銭湯などありて 四丁六丁は活湯といふなり 常に抱女絶つといひ

賑り と 淫地なり 一 兼徳三年日蓮宗妙因寺の日命妙源寺の日順

妙長寺の日善等此地に抱女一不法強氣のゆかまひ殺害るにたり

ら八月十四日彼三僧法衣と着しぬり町中を引渡され磔り行

されのち抱女とてめられ万治三年正月焼失の後其町とを廢せ

らま 一 其三寺ハ合猶法華寺町にありて法輪寺淨蓮寺照遠寺也

寺号を改り 一 編年大喜及び樋口好古の著書に云ふ

雛市 玉屋町鑄炮町中須賀町大久保見町より二月廿日より三月

二日まで雛を賣る内裏雛空形雛童子形の裸人形お色一 新様と工夫

男女の五人形居人形お色一 種々様様とぞと錦繡の衣裳金銀

をちりてお色一 俗に人目と驚りて遠近の貴賤看集りて買求め

或ハ見物の諸人奔走して其賑合常に百倍たり又四月下旬より五月

四日まで店々にて曹人形普請刀お色一 飾り物とて其賑合雛

市に同 一 ちりて名古屋は雛造の上より他所の雛に比し

雛の世の人の秘所なり 一 此雛は二つ又世に何やと云ふ人形

杉の町ろ起源



細工の名人出来て雖人形の外に祭車の偶人を造る其奇巧と尽し自由と  
たゞいふやういふの竹田からんにさきまほりやうしりやうも其  
しけ四五尺乃大人形と造り貴戚老若婦人の風俗まねくの衣裳とけり其  
所業に及び或は笑ひ或は怒る塔の面より氣とり誠と生ける如く肉色の  
油きつた心撫髮のりけり此眼中のすこやちい

尖森庚申堂

庚小路乃本町東にりり修驗良實院當山法清壽院同行  
みてこれとも元祖信行院ハ俗苗馬淵氏近江乃佐々木家の屬士  
ちりしやいり本尊ハ仏工春日此作うむむ清須の城内乃ホ  
中より掘出さる此尊像と輪室と箱に納めて埋左在しと云  
乃一名と尖といハ故世の人尖森庚申といハ乃毎月十八日青面金剛  
の縁日とて春詣乃人多し柳藩千筋縁といハ戯文に柳某師夜間捲  
狂女に水無月乃空を涼しき後小路のつさ志留夜間帳庚申堂の賑  
合や茶屋乃床机とけり函なく涼みうてらけ参詣ハ損徳なりハ良室  
院云云とていふよてとび堂のりりのみたハきとて幼と

白華園信阿墓

性高院乃寺中にりり信阿俗稱天野治部信景本藩の

世臣ちり本姓ハ藤原氏天野藤内遠景七代の末裔下野守景隆  
曾孫氏部少輔遠跨遠江國秋葉の城主とて吉野の官軍に屬し威と近  
國小ゆり信景ハ則遠跨十一代乃孫天野孫作信章の男にて幼名  
と權三郎といひのち源藏と改め正徳の末再び治部と改名は曾祖父  
久右衛門正定永祿四年三河國岡寄に生れ天正二年とて信康  
君に仕へ奉りより打續き性高院君及び國祖賢君に奉仕し  
高武功りり其子惣右衛門孝信又英名りり其二男孫作信章寛永元年  
より召出され別に家と起り多くれ采地と拜領し貞享元年死去に  
小わいて信景父信章の墓表と稱し正徳五年より武役の重職と奉  
り錢炮の歩卒と預り指揮し享保八年病に依て其職と辭し同十五年  
致仕し家督と嫡子藤左衛門英景に譲り剃髮し信阿孫陀佛と  
稱し同十八年五月八日七十三歳とて病死に此翁文武と兼備し經  
学史典古今の載籍と涉り奇才とて詩歌とて生涯風流と尽せ

櫻林  
古覽



香

人々あそびて花の  
 花の下にりく  
 空飛  
 木のさきあはは  
 ありわねさうさ花  
 こらへまにのりくと  
 あはうた  
 山田法祥





て隨筆の書と塩尻一名白華隨筆と名づく大部の書なり。多く散失

して今僅に百冊むらりのこれの其餘の著述尾張國人物志尾張古城

志參考尾張神名帳本國帳集說尊命記集說尾張國造國司畧誌尾張十

大寺紀畧尾張惣社參詣記神臂絶塵家紋舊傳伊勢奈官記等。於寫本

より行ふ其外經學の書文筆の雜記道の記紀行の類も著書甚多く

かぞへ。作詩ハ享保板本ハ防兵詩選元文印行の玉壺詩稿等に入

入まりき陸奥の守山君御編選の歴朝詩纂後編に天野景信の詩

とく入りまふ。實名の持創。はらうて此信景の詩なり。とく

人なり。これとも然るやいなを究め。玉壺詩稿に木下安間の哭白

情の詞のミウて願。華園信阿詩とのせこれと哀

信長公戲作の繪馬 總見寺のうち信長公の影堂に掲げたる扁額なり

近江の安土惣見寺の佛殿にやれらるる圖と元禄元年十二月當寺の住

持白翁和尚うつゝとて此影堂にうけり。とて遠碧軒記に安土

惣見寺の佛殿の繪馬に男子捧とつきと撥と傍と捨置き其と片手に

持てやとりに政帳と釣りたを狩野永徳の画あり是ハ信長公の御

好よりて氣と捧の如く直まらへらと捨て政せげばみよりいとよ

さとの繪に被仰存証畫圖なりと志はらり高力種信の名陽圖會に

此繪馬の圖とのを置ざれど其なぞの判りやう少くたう一り故小

黒川道祐の説とよりてこゝにのくはのみ

大治山安用寺 門前町の東側にあり曹洞宗同所善篤寺の末寺なり

永禄十一年の建立より清須の外町にあり。慶長年中こゝにう

けは杉之町の御馳走所御營建以前。國君此寺に御駕と寄せり。

事とて。ちとせら。瑞竜賢君御真筆とて大治山入額

と書。住持に下賜。今猶此寺の榮とん

画像の大達磨 文化十四年の春江戸る画工北齋戴斗名古屋に來

て逗留。らるる存下の書林ハ北齋の画帖及小説の冊子と印刷せ

やせどひ立板行の下繪とかき張られと云ふは諾く是と画  
く昼夜とてはひとけりて松月にて數十帖成り其細密の妙  
手言語と及びて或人これとて久しく細画に筆と屈縮め  
ければ定めて普通の画幅さうきよからんと戯れ難くけしと北  
齋はまき誠然腕延びの爲に大画とちて衆覽に入るとや  
せよ也といひて好事の筆ふれとていせ真あるものと扱  
人誤らひ合せて其事を権ぬて仙遊の厚紙千八百八十枚と合  
羽造は者に命じて継まさせられ長十間横六間の一切りとな  
ぬ十月五日西掛所の境内集會所の前々後場に其席とせり杉九太  
りてまき垣と結び廻り其中に料紙の半分と表ひろげり北齋  
及び手傳ひる門人等玉たすたうけて其まきとせられ米依五箇の葉も  
亦作まはる大筆及び中筆小筆其外拵桐皮蕎麥等もて造りた  
尙筆にて達巻と画く見物の貴賤群集して山ろ如く頭のうき半分

描きそのちうけて左右六間隔て建置ける二本比杉柱に檢持紙  
ろ上の方の両端に茅繩と付け轆轤りて引揚げ大長暖簾とせり  
如くは扱残りたる料紙と地に延べて下の方と書き終り代諸石  
丹米等練りたれは残まらぬなり翌六日猶つけ置れて諸人に一覽  
せりむ實に奇代の壯觀也むり東福寺の毘殿司涅槃の大像と画  
きとハ似合處くとありは是ハ只一時の戯れなりて万人の目と驚  
こせりわらふ一與と又泰平の御世の御恩澤をなへ

山水花鳥のそと心ちよハ一色目も有りてははぬ  
後そ風疎ちりと人のひびきとて北齋に有りて

達磨く弦のたはりに風流と和りたるはとてソノ人 月光筆也

橋町

とて本松原といひて海道並木松の間に農商の家とては

そが其うちに古道具古衣類等と賣物者と有りと寛文四年町

き此家並とて瑞龍賢君町の名と附めし御直筆よ橋

町寛文四年辰十一日五日と書と録は當町の昔に下賜のりて今猶持持へり

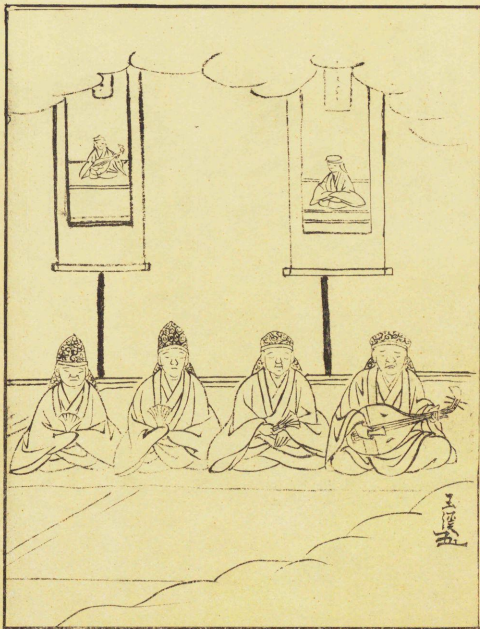
七ツ寺  
稲荷社  
并林泉



同寺

十月十五日弁天講

来由名所高會に之り



三五五

三十一

かりく表装一箱二重に收めて町内の重宝に扱ひる。彰ら故に  
てかく名つけ流ひこそや押さうり奉は。彼松原の古手店の軒にう  
け置けは古衣裳の垢つきたるを又よめ改むとせ着用せり人のう  
げり香やきき残まつくとと思ふらせられ古今集に歌をひよみ  
人ららぬ

さつれより花たちをながむ者よけはむう一人の神をこまふ

と流の歌にうりてうく名つけよせ流ひたるにせく風流取  
ふ町名なり

松原海道の跡 橘町より糞田の幡屋よりりまで二十餘町かど  
家並むり頭ハ引けたる並木の松原道よて葦津或ハ清須よ  
て糞田の方へ往来すなり。堯孝法印の覽富士記の帰路の條に  
ぬはりよりとす所也

故人地をつつてたふ流りぬき世にぬれやとや

せりみちり如く都人の所はよに下はよは必此地と往来せりうせ  
と堯孝前後の人これ紀行道之記にもに松原の道なり。うハさ  
らに足とひむり宗長手記の糞田より清須へ至まは條に 宮と  
たちて四五町松原に兼てまれば宮の若丸僧俗色も有せめてたひ  
うとい舞ひ鼓笛奥に入り心易といふこれ法師又奥より也。こ  
みふなこりわみて立られぬ

木きのわて月とやうりもむ得せはぐのつこのま討れを一笑に  
せぬはうく此道松原にてあり。ちあられなり

西ノ小路妓樓の跡 古渡稻荷の社の西れりりて廣く其ふはまれば

也。享保入末元文のころは地及び前津の富士見原に抱女町ありて  
ありと西廡といひし。又と東廡と呼べ。揚屋茶屋數十軒賣女數百  
人其繁昌のさへ三都の遊女を分輪に似たり。は稲荷の前に秋  
樂堂といふ雅亭ありて抱客とりてなすき由世に跡らきふまひ

とちりて其頃の詩人らも東西二郡の金塵有様と作ま  
し詩文甚多し板行の詩文集數十部にのちて其文辞に  
り恐らく筋のちきよもあらずんばちりてちりて  
り契情あはれ雙五といふ一小冊ハ其の世喜とうも風雅人々東  
西色里の細見ちりびに遊人のなりむきと戯作と板行したるむと  
しりき志ちりと本ちり

那古野弥五郎 織田信秀に屬して其城下古渡其居地の古渡に住今定りたる武  
衛家及び今川家に從ひしり藏人高信因幡守數順ら一族の旧  
家也歴々大身よて従士家人甚多く父子二代弥五郎と稱マレ  
と武勇拔羣れあはれあり又弥五郎ハ信長記織田真紀等に天文十  
一年壬寅八月十日參河乃小豆坂の軍に力戦して今川義元乃足輕大  
將由原某に討取られしり志ちり其子弥五郎ハ織田真紀の天文  
二十二年癸丑八月海津合戦の条に終りに公信長從は此處攻清洲難田

攻掠武衛公麾下有梁田弥次右衛門者賊士也那古野弥五郎年十六七  
有従者三百許弥次右衛門乞憐為断袖之好勸弥五郎及家宰納款於公  
于那古野吉公大悦弥次右衛門内應納公軍於清洲燒民屋除外郭所守  
唯城而已公以武衛公居城中欲欲合圍而拔城城堅不拔歸軍於那古野  
とよく同紀に永祿元年戊午の冬信長公俄に將軍義輝公に謁せむと  
あ上洛ありしに齋藤道三の家来小池吉内と云者其外四五人主命に  
りり従者三十人計具して京にのり隙と有り信長公と鏡地  
とてお殺さむとせし那古野弥五郎、従者丹羽兵藏といふ者途中  
にて見頭し公の旅館へ参りて其しと告げしり公危難を免  
れしりしり志ちり其功名ちり

盗人の表 古渡より今ハ廢まで其所定りぬら古渡誌と  
い小冊に足りむりハ大なる事ありて野武士りり  
其大盗人數人隠ま住しり里民いひ傳へりいり盗賊



一八七五







盗人森古覽

徳田吉洗集

盗人の

森の名ろみか

竹代の春

冬夫



と云ふより又俳諧阿波手集ハ友次ハ撰じて古雅な板本なり  
昌桂山恭雲寺 尾頭町の北側にありて瑞光山大應寺といひて貞享年中

ころにうけを志水甲斐守忠純の内室昌桂院尼公の本願よて其後  
子主膳忠行法号泰雲院玄透智英居士の菩提のため、再興りて也  
元禄年中其母子乃法号によりて今の山号寺号に改む

尾頭義次塚 尾頭町の北東にありて今小名所園會に為朝家とて乃せ  
置（は）と今誓補（寛文先賢乃）といひ物に尾頭次郎源  
義次古渡（剛居）事年久一勅により南紀の鬼賊と討平け  
より帝より鬼頭代氏と賜ふ義次ハ為朝の次男法名と源徳院と  
云位牌ハ厨子に入て願興寺にあり里老誤りて為朝塚といふ  
と俗せり其末孫今猶ありて御城下に鬼頭氏と稱し代々俗名八郎  
や名のれ心ハ則為朝と祖襲りて海東郡福田の鬼頭竹山も同

末葉ちり（為朝北地に居住あり）事古書にハ所見ありといへども天野信景（北平  
君山等）の説に為朝の子孫ハ坂の市部庄に居住たりといふ又  
高須君の御領信濃伊那郡鎮西野村ハ即明神の社司鎮西氏ハ八郎為朝乃末孫  
りて尾張の市部庄古渡ハ鬼頭氏と同祖のより社司の家傳よりいへば為朝ハ  
子忠大助次郎一名尾頭次郎といふ名乗  
子忠大助次郎一名尾頭次郎といふ名乗

道場法師 名所園會にありてと俗に云つれといふ其意を尽さ

（は）ゆゑに古書の全文とと心して其事實とをめぬのこ

日本國現報喜惡靈異記曰昔敏達天皇（是誓余詳語田宮食同  
津名名倉大王敏命也）御世尾張

國阿育知郡片絶里有一農夫作田引水之時小細雨降故隱木本撐金杖  
而立時雷鳴即恐擊金杖而立即雷墮於彼人前雷成小子而隨汝何報  
雷答言也寄於汝令胎子而報為我作楠松入水泛行業而賜即如雷言作  
倫而与时雷言莫近依令避即躡躡登空天然後所産兒之頭纏蛇二遍首尾  
垂後而生長大年十有餘頃聞之朝廷有力人念試之求於大宮遷居尔時  
王有力秀當時住大宮東北角之於別院彼東北角有方八尺石力王自住  
屢出取其石而投即入住處閉門他人不令出入小子視念名聞力人者是

也。夜不見人。取其石而投。蓋一尺力。王見之手攢攢取石而投。從常不得投。蓋小子亦二尺。投蓋王見之布。亦投。猶不得。蓋小子立投石。屢小子之跡。深三寸。踐入其石。三三尺。投蓋王見跡。念是居小子之投石也。將扳而依。即小子逃。王追小子。通牆而逃。王踰牆上而追。小子亦返通而逃走。力王終不得捉。念自裁。蓋力小子更不追。然後小子作於元真僧之童子時。其寺鐘堂童子夜別。死彼童子見白衆僧言。我促此鬼。致謹止此。火安衆僧聽許。童子鐘堂之四角燈。備四人言。教我捉鬼時。俱開燈。蓋覆無其鐘堂。尸童之鬼居大鬼半夜。來停童子而見之。退鬼亦後夜時。來入即捉鬼頭髮。而引鬼者。外引童子者。內引使儲四人。慌來燈。蓋不得開童子四角鬼引而依。開燈蓋至千晨朝時。鬼之頭髮。引刺而逃。明日尋彼鬼之血。而求往。至其寺。惡奴埋立。衛即知彼惡奴之。吳鬼也。彼鬼頭髮者。今收元真寺為財也。然後其童子作優婆塞。猶住元真寺。其寺作田引水。諾王等妨不入水。田燒亡時。優婆塞言。吾引田水。衆僧聽之。故千餘人。可荷作鋤柄使持也。優婆塞彼持鋤柄。撞

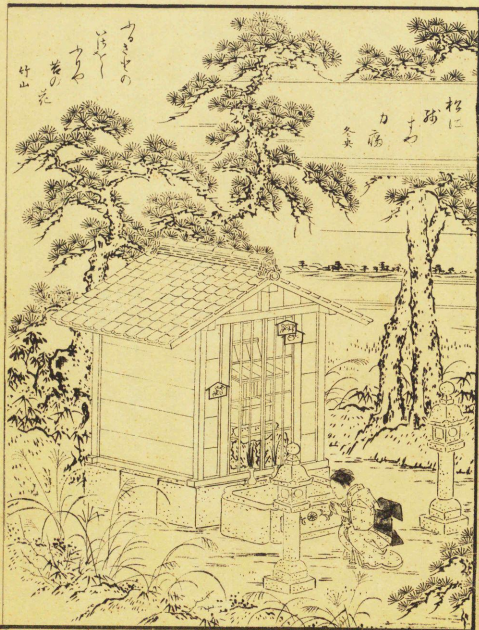
杖而往。立水門口。而居。諾王等鋤柄。引棄塞水門口。而不入寺。田優婆塞亦取百餘人。引石塞於水門口。入於寺。田王等恐乎優婆塞之力。而終不犯。故寺田不渴。而能得之。故寺衆僧聽令得度。出家名。号道場法師。後世人傳。謂元真寺道場法師。強力多有。是也。當知誠先世強修緣。所感之力也。是日本國奇事也。

意乎加譯語二合食肉二合久濟況也。太不詭和農夫ルツク小細雨三合  
操フ鑽リ試コ措三踐フ利ノ荷ツ鋤ニ  
本朝文粹道場法師傳 都良香

法師者尾張國阿育郡人也。不得姓名。相傳云。般達天皇之世。尾張國有一農夫。夏月。就田于時。天墮雷雨。而父避雨。樹下。支耒而立。俄而雷墜。父前狀如小兒。舉耒。將擊雷。語父云。汝莫害我。我必報汝。父問雷云。汝何以報恩。雷答云。我令汝生異兒。以此報汝。今所望為我造一楯。舟其中。盛水。泛以竹葉。忽與我。父知雷言。以舟與之。雷得舟。作便須史。登天。居數月。父妻有身。及期生。







建て伊勢太神宮と勧請す故名付と村民の説なり昔ハ水深  
く田畑の耕作と心乃依ちらさるゝに寛永年中に堀割悪水と落せ  
しより上田はなかり又鷲鸞喜里の海道の町並ハ寛永十一年

將軍様御上洛の時諸侯方の厩或ハ下宿なり其跡ハ家作りて

次第に繁昌の地とちりしと云はせり

榎木町 押切町五町目のちりしと云ふ白山権現の境内なる神木の榎

樹數百年とて世に希ち居老木なり故古來より榎権現と稱し

其門前の町とかく啗ひ來り因果物語正三の著書に尾州名

古屋より下榎木町とて去者病中に藏と作りり心明藏の方計り

詠め入りて居より煩ひ重なり隨ひて孫藏と見ゆと云に依て半切

桶に入きて昇少と藏へ入ると又回りとも二度昇行て又き也其

如く七日程して死にたり頓て幽冥と成り藏の事計り云てうねり

せ居りて呼りたり夜に藏の脇に居り居ると也と云はせり惡俗不

風雅なる俗話なれど町名のちりしと知は證據のきり小志ははる人  
あやむりなれ

大矢氏城跡 押切町の南裏にあり松平君山ノ著書に押切城ハ大矢佐

渡守居りしと云人しひ傳へしれといつ頃うなる人知りし

たきより志傳より大矢氏ハ今昔物語集に平致経ハ平致頼と云ける

兵の子也心猛くして世人より不似殊小大なる前射されハ世の人

此と大箭左衛門尉と云々也と志傳より佐渡守ハ致経の子孫

なりし先祖の一族長田忠致等ゆかり當國にすみ居れり其ゆ

かりより大矢氏と此邊にすみしと猶考ふ

秋葉権現堂 万灵山周泉寺の境内にあり勧請の年月詳ちらひ所

ら生玉神として例祭八月十七日の夜試樂に鈴神樂と奏し十八日湯

立と奉仕諸人の奉詣多く賑はり寺ハ曹洞宗とて春日井郡下中村  
天桂寺の末寺なり

因云柳町と云ふ名の起りハばりしと云やうり中下  
花の木の地と並ひりしと云に柳根と云きまじりし

那古野山の麓なり。八人家建りたる。後と及池又御池池あり  
とにあり。土川柳の成りて有る。やまやうらひのり。と云  
贈交花堂所の各にあり。過思つる後世にのちをたふすかゝの  
かくきて語り。時し今春の半らるる東城。亦に名にけり。信前  
頼みとて。いん。う。いん。と云。

うづみ徳島

さく毛や交てふ。さく柳まうら

也者

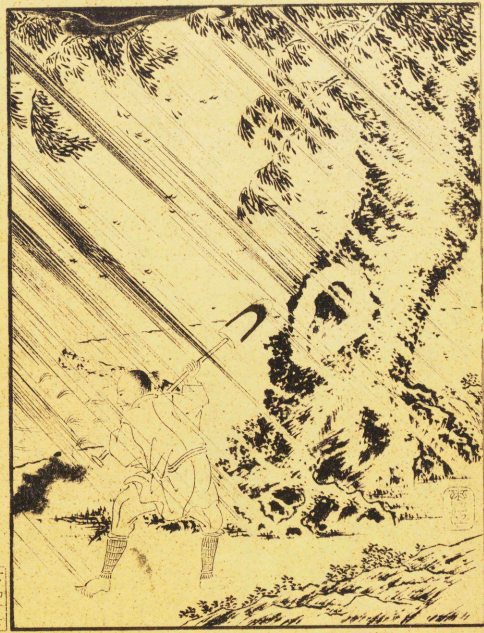
鹽川伯耆守國滿 天野氏の尾張人物志に愛智郡中下村の人と云ふ

一これと其居地今定かな。以國滿織田家に仕へて軍功勳勞あり天  
正七年撰津田多田に居ける時信長も荒木村重と征伐せん。彼國  
不到り。強ひ御鷹狩のやうして民家に入。強ひ國の安否と問ひ。強ひ  
に老夫より伯耆守殿。物毎々淳直と事。万民穩。めり。り  
とのみ好ま。強ひなれ。信長公。知ら。り。てや。り。語。り。り。向。と  
聞。強ひ。感。思。召。て。同。年。四。月。十。七。日。森。蘭。丸。中。西。権。兵。衛。尉。と。御。使。と  
銀子千兩と國滿に強ひて。復賞。強ひ。り。り。信長記に。志。向。

織田真紀に伊丹の城卒と戦ひ敵の善士三人と斬りたる軍功により  
て白銀百枚強ひ。さく。志。向。て。信長記に。む。ね。と。少。り。り。一。り。彼。國  
より卒。り。り。り。り。塩。尻。に。撰。州。河。邊。郡。上。津。村。善。源。寺。に。鹽。川。伯。耆。守  
乃。石。解。り。り。り。志。向。せ。り

土方河内守雄久 名古屋村の人と信景の人物志といへり清和源氏大  
和守頼親の裔孫土方太郎季治の十三代刑部少輔信治の子なり土方  
氏の本貫大和なりと武鑑に本國尾張と云ふ事。故りり。太郎季治八  
代乃孫丹後守弘治子息二人あり。舍兄彦三郎房治。父と云ふ。伊勢  
乃北畠家に属し。舍弟彦四郎時治。尾張の斯波家に仕へ。是則御有内  
淨念寺俗姓の祖なり。彼寺の家譜より。叔北畠家没落の後  
伊勢の土方氏も尾張に移住なり。雄久も。勤。兵。衛。尉。と  
稱し。織田信雄公に。り。り。り。り。東。照。官。に。仕。奉。り  
る軍功多し。秀吉公薨去の後諸大名不和と。り。り。り。り。雄。久。大





野修理亮治長と語り合せて諸將の順和を取結ひし頃の事  
五奉行は是より一を以増田長盛長東正家等説くが爲より  
慶長四年九月十四日八日雄久常陸国佐行義宣の館に論せし事  
まこと誠忠堂より以程なく御赦免の象と判へ從五位下河内守に叙  
任せられ同十年伊勢国薦野の城主となり同十三年十一月辛未のよ  
一家忠日記追加及び白石先生著書中に之より其外名古屋出生  
人武衛家の屬士中川因幡守清政と高名の人多しといふも  
事繁々れはこれと畧す

忠孝堂 中下上宿にあり医官野間式茶起り輕き御扶助の者に忠  
勤孝養の味はひとわらめかため小弘化乃始より杉本蘭齋鶴飼  
蘭齋辰巳柏堂渡邊甚里岡田寛齋等々して忠経孝経といふめ  
和漢の典籍詩歌連傳までも講談なり初生を勵ましむ其業い  
まこれ傳ゆけりちより御聴に達し其忠孝の名にめでさ

せ移ひ恐多くも忠孝堂三字御源筆乃扁額と下賜ひぬ則聖教  
忠孝の道に貴賤のへしてなき事とまり後(ぶち)と(む)む  
泰心賢君下と御憐の思召莫太にわらふまじ(ふ)士外の者こそ  
了てふ話こび奉り御逝去のちよりて爲め心よりてきえ立たは御  
奉公と仕りしや一般に御患こそ

堀留 中下御門の外朝日橋乃下なり慶長十六年の夏より堀川と御

堀割りてこゝと堀とあは川底甚深く海潮さくまてさ(ま)る  
故堀留くも呼べり(り)と(ま)此よりして鯉魚及び鰻魚のかり  
止め北にあり(り)救守の御米藏(蔵)御引移(移)其跡新  
馬場及び芝生に松林と成り居(居)と天明のま(ま)め大葺川と疏鑿して  
堀川に落(落)又堀詰町まで江川乃分水とと湯湊せ(せ)後川に流氷多  
く年々洲を押し出(出)あててさ(さ)潮ハ二里計(計)南(南)まで退(退)き(き)り  
昔の姿とは頗(頗)りた(た)り(り)舊門は荷(荷)ろ(ろ)撰(撰)ひ(ひ)る俳諧書(書)成(成)種(種)元(元)株(株)



の自序あり  
て板行に  
にのせよは堀川月見舟を登舟と左にりく其頃のさほ  
と味い知れ

今宵は八月十五夜月見やまをたてて川也の兵争くこり  
月見は秋の夜をささぐと省のまのひかりりも  
木にささぐと  
物くとも月の光り元  
りすんや高地が半歩走りてわすれに一分

丁し月や水の音を  
雙古

雨後のれに休らふ月夜  
神屋

月又舟借まはれ  
水舟

いそ月の夜や湯釜の電報  
可永

くらりりる我に月又舟を食ふ  
与竹

きの  
松牛

人のち  
松ト

月や  
冬文

て心月や伊智志

収宣

御園町 御園御門外より七ツ寺の裏門の西まを南北半里余ゆり

乃高人より住り其うち南の方多く武士町とむむ清須の見曾野町

伊勢太神宮乃御園町の乱世に退轉して御園廢地名のみ残り

市街とむむ後ハ其傳とむむ文字とむむて文禄三年長

尾武藏守吉房入道常閑乃清須の市日と定めゆり制札一枚證

狀一通當町の紺屋某の家持傳(た)りに見曾野町といけり

當所よりつりてのち猶又文字と唱へて替りて御簾野町といけり

國祖賢君舊儀とよく志しり市令に仰せられて今此町名に改め

をを

道園屋鋪 御園町通り乃南れとむむ西側にりむり賀島道園御

薬園と預り奉りとみく乃某草とい所とて培養いたる

たる

御菜園と駿河町北の御下屋鋪の内へ移し居りしをち廢跡庶人の居地となりぬ道園ハ學匠の名ありて子孫本藩の侍匠より海邦名勝志一名住持に永壽院督島道園號東和近侍瑞龍公最達匠藝老後所詠養生和歌百首有りと云ふなり

學館の起源 此瑞長島町乃明倫堂と云ふ名所國會に乃置きしれと故りて其事實を詳にせし令江戸名所圖會の神田此聖堂の紀伊國名所圖會此和歌山奇合橋の類宮の圖を之に其御模様を小替りありて一様なり此明倫堂と又其字同なりし故に其異同と云ふもさうに覺し一覽に傷小柳國祖賢君儒學を御眞隆なりせられ羅山先生と珠に寵遇し流ひて寛永九年江戸上野乃林氏此宅地に先聖殿と建させ給ひぬ羅山文集の武州先聖殿記に庚午上野且母受其金之恩費乃在工構小塾主父庫柱聖尼陽益和原義直御有番島之益志經始一履置聖像及銅首五條等曰先聖殿又其像聖像以實也予并其聖之尊雖古之同學不識知是則御治世之後江戸及び諸國に學館經營の權與せり也と云ふなり

神田昌平坂の今の聖堂ハ元禄四年の御建立より六十年ころの後なり 又名古屋乃御城内より孔子堂と嘗み給ひ唐銅はくを此聖像と安置し二仲の祭典と修し給ひ明倫堂乃これなり延享五年二月布施芳澤俗林破五衛門姓安といふ儒者に中下御門外より敷地と給ひ學問所と取建させし門弟ハ教授なりぬ給ひし芳澤退轉の後松平秀雲須賀安長等に乃多給ひて講學をせしめ寛延二年十一月十四日明倫堂と名づけ給ひ其後天明二年乃たふ今の學館と經營し給ひ翌三年四月成就講堂とて之を教字に殿舎備はり給へ細井徳氏に純述館に惣裁と命ぜりし主事役教授役ホの諸官人を定めしれ同七年四月聖堂と長者町の方小建給ひ前件御城内乃からりし此聖像と遷す給ひ春秋の釋菜怠りなく修し給ひり平日教百人の學生と置練字とせりぬ給ひり永世退轉せり天保四年正月より儒官鈴木朗と命ぜりし日本書紀以下乃和書と講談なりし給ひりより和學乃講席も始まり植松茂

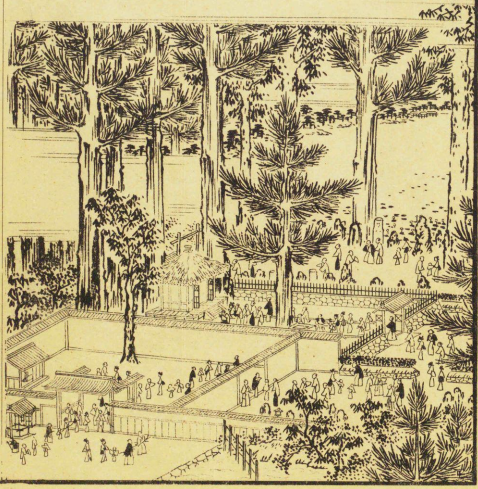
七月十日  
観音拜参

と池あり  
てちびのちび  
たむくよ  
ふゆのちびありて  
おもしろ人



香

一ノ五十一





明倫堂



高

仲春祥燕鵲  
登大亭  
北是天經  
合衆聖道  
滿堂  
西臣馬子  
何嘗春風  
仲月丁  
善贈相山公





むやぶきア」といふに、まて文字を用ひるべしと仰られり。是又、  
字しく大契ひ、まき仕合也といて退出しぬ。これ日雇奉行といふより、  
彼、言葉に叶ひし御神（イハ）名ナリ

晴明の辻 来名町筋袋町の四辻といひ、往昔安倍晴明（イハ）、松符（イハ）此地

に埋め置り、故後世迄と災難をまぬれ、御辻府以後當町に  
限りて火事ナクハ、實事といひ、めまたく神社考に安倍晴明

者仲麻呂之後也、就賀茂保憲、字天文窮其謚、奥云、晴明有秘符、世人就  
而求之、因与鎮宅符貼之、屋宇則免火難と、以、まなく、一、元晴

明朝臣の事蹟、この小町、海軍部丹羽郡等とありて奇  
談多し

福島正則普請小屋の跡 袋町の延命院（イハ）延命寺といひ、此所より其  
近年院号に改む

舊地あり、い、信より慶長十六年、御城御造營成、就の後其普  
請場の跡、正則朝臣再興の清須の延命寺と移され、なる、一、境内

なり、愛宕権現、下方左迄承弘の守護あり、又社より小瀬氏より、此

鎮座也、是亦福島家の由緒なり、小町より、まなく、此普請場跡の、  
異説といひ、一概に定め、後人の誤り考す、一、昇平日

新録（イハ）田原新録  
治学抄行に、忠吉君卒後、封義直君於尾州、賦役諸侯、以城、那姑射

當此時、半福島正則、池田輝政、淺野幸長、与丹波篠山之經營、以不与、那姑  
射之役、既而、神祖有所以深慮焉、乃亦命三侯、倉餘山城、以就於尾州之

事、一日、正則語輝政曰、此年以、駿武兩城經營之、役而、諸侯費民力、亦許多  
也、然武与駿也、為天下鎮城也、則不敢顧其勞、今支君之居城、而亦役諸侯

豈不亦甚矣乎、公則老君之姻戚也、請為我備私喜之、輝政不應、加藤清正  
曰、福島侯之言、粗直也、若實倦乎城、役則不、榮長言、而致馬耳、若不能、然則

馬得違令、正則乃、報然矣、輝政以為、戲言而已、後日、輝政以語之、神祖神

祖乃、令輝政告諸侯曰、聞諸侯、或有厭倦乎城、築者焉、若然、則任意而、還其  
國、固城、深泥、以待我、至吾、請問、行期於此、首、正則、而皆、大威怖、罪、勉、就、事、大  
城、終、成、矣、といふ

北城山葉師寺

西銀治町通、袋町より南にありて浄土宗性高院乃未

寺也貞治元年清須の五條川の淵に宗師の木像流し寄るを拾ひ

とりて城内の北橋に安置しける。此像夜に光明を放ちける。元文

五年城北北市場に茅庵を營み其像を納め北城山正光寺と名付けたり

と慶長十六年此地よりついで今の寺号に改めり。松平君山

乃著書にいひりされりと清須の城永和中に斯波氏始めて築

き守護代を置て守らせしゆみちれハ貞治の頃ハいま城ハな

る。ちる年号の傳説も少く間違ひたるなり。へ。本堂葉師の同座に

安置の十一面觀世音ハ行基菩薩ハ彫刻して廣井八幡宮の本地佛也

とて享保五年當寺にうつり。

醫學館試問

醫學館の華名所國會に試問ハ唐の及第遺風なり春秋

兩度當館して諸医官御各御醫師ハ普請及び惣御醫師の子弟年中

修業の勤怠を試む試司ハ代々淺井家に屬從寛政十一年より淺井平

試問の書品ハ素問、玉樞、難經、傷寒論、金匱要畧、これ外諸方書諸本

草等なり當日參政二人監察以上司一人右筆署の棟梁一人并に典表

乃官医出席ありて問對を檢察して會文の中不中により賞罰を曰

中二つ治のいふとめてきた御規範なり。

淺井氏本姓和氣朝臣とて京都に住り代々醫學に通達なり。淺井

周伯名ハ正統号ハ東春田華馬業記ハ馬書講說淺井周伯御幸町跡小路上ハ

同周道名ハ包政号ハ東野其名良臣名鑑に出同賴母名ハ惟實名ハ國南其

傳小に出り著述病撰年抄摘要なり同周名ハ正路号ハ南海其名皇國名臣傳ハ

著述醫學鉅撰十字本朝千家方ハかく此如く醫學海内にきこえ

る名醫也醫學館三字の扁額ハ源懿賢君乃御真筆なり。開講

至安永帝ノ祭日等に揚子奉治其餘の平日ハ

四子出産の事

塩尻にきこつ頃我名古屋有下伏見町堀切一町上東へ

入り町まで四子をつみり産婦はくなくて進きたるまてあり

醫學館  
試問



いと志<sup>し</sup>は<sup>す</sup>て年月も高家の名もいとつら<sup>り</sup>せに稀なる多産の  
九日本書紀以下乃國史實録中に三子とありて物と賜ひし事多く見え  
りて四子以上と産む其希なり續日本紀云慶長三年二月戊子山背田相樂  
郡七嶋首形名三産六兒初産二男次産二男其初産二男有詔爲大舍人  
天平勝空四年七月甲子下經岡次太郎阿古賣一産二男二女賜報并乳母と見え正保  
二年秋行<sup>ら</sup>む<sup>る</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>て</sup>三條院御宇德仁二年に一女四子とありて志<sup>す</sup>は<sup>す</sup>て<sup>り</sup>近世に  
と其多<sup>し</sup>なり<sup>と</sup>塩尻に空永二年二月廿二日攝州丸龜農人町の高家廣島屋茂  
右衛門某六子と産せりといふ廿七日の夜男子廿六日の朝女子同夜二男  
子廿七日の子と産せりといふ廿七日の夜男子廿六日の朝女子同夜二男  
子廿七日の子と産せりといふ三月四日に身まうける<sup>こと</sup>なり<sup>と</sup>志<sup>す</sup>は<sup>す</sup>て<sup>り</sup>  
北笠院談に和樂兩岸和四領無取谷と<sup>し</sup>所<sup>す</sup>て四子と産むと泉州成田左近物語  
あり何ともつら<sup>り</sup>き多産なり

氏政山隆正寺

花屋町筋の長者町通乃西にあり浄土宗にて石切町

養林寺の末寺なり兼應元年山下市正氏政其母隆正院乃菩提のた  
めに東寺町寶樹院と云慶寺を再興此地にうつ隆正寺と名付け  
養林寺の住僧專譽と開山と隆正院ハ志水加賀守宗清の二女うて  
相應院君の御妹なり故國祖賢君瑞童賢君に近住奉り勤功の  
り<sup>り</sup>女性たる山下大和<sup>三郎半</sup>氏勝に嫁して市正氏政とあり氏政同

苗時氏に命<sup>ず</sup>と創業録と撰<sup>り</sup>て歴史考軍一卷安土創業録<sup>五</sup>難波創  
業録<sup>十</sup>武江創業録<sup>六</sup>慶長創業録<sup>十</sup>創業録引證<sup>卷</sup>創業録考異<sup>二</sup>  
卷<sup>四</sup>十一卷と著し山下家に傳へて門外不出の秘書といひ並河通明  
乃序ありて希代の實録なり本堂阿孫院の木觀音堂<sup>十一</sup>一面觀音は是  
則名古屋三十三觀音の一所なり

法皇山法然寺

日置乃旅籠町にあり浄土宗とて整田正覺寺の末寺

永正四年三月深空法師の建立にて明鏡山法浄寺といひと享祿三  
年今の山号寺号に改む本堂の本尊地藏菩薩安阿孫の作りて其願  
内に納めざる小像は後白河法皇の勅刻法然上人の闍眼佛といひ佛  
合ハ腹ごもりの地藏或ハ子安地藏といひ山号寺号ハ此小像によ

る

洞松山長榮寺

御城外の東北柳原にあり源順賢君の御本願なり

此地に御祈願所を御營建りてせられ文政六年四月廿六日智多郡若

長榮寺

脚子殿杖歌集  
 水紀のまゝに  
 五歳の流をたれり此の  
 公と縁一ゆらん

涌蓮法師



蓮池江原寺の御札の  
 事度あり本寺に  
 舒明天皇壬辰秋月蓮  
 池御池蓮元一  
 皇極天皇三年丙辰秋  
 蓮古宮蓮原寺是  
 地古社全皇元年丙辰  
 秋神降宮前治蓮三  
 元一也一日本社皇及古  
 鎌倉元應元年五月二  
 水事申上第二元白蓮  
 とわぬ一古別名蓮花  
 一以のて皇海東年  
 一奉正元一宮蓮原寺  
 一蓮元蓮元御宮六秋  
 一多世のて五世のて  
 一了元も蓮池園と名  
 蓮元第二元のて元  
 一て蓮華もわて天  
 一七蓮堂美す



屋寺村岩屋寺の住僧蒙潮（一）とて住持とて移り天保六年愛智郡諸  
輪村洞松山長栄庵寺（二）号とて天台乃梵刹とて移り蒙潮  
ハ學徳能書等世にカレたき名僧なり 本堂（三）唯観音拜堂（四）東にあり  
其餘殿宇多境内の蓮池廣く折一蓮二葉乃瑞華と庄は是則戒律  
乃餘業也といへり境内より南の方ハ鳳山公子勝長君の御別荘の跡  
也當時多春園停雲岡玉壺亭觀蓮舎捐翠軒養老泉望岳臺（五）七景及  
ひ御築山臥柳湖赤松橋等山花水月の風景と愛し移し（六）とて枇杷園  
句集に

多春園の櫻（一）を移し春とてうりいゆも泉石の様ハ申す（二）柳木  
を植は車子（三）乃如く植させ移し早き櫻ハちり浮びて汀のけき（四）  
ゆらく（五）わたりろろろ乃花の上漕と聞えし（六）家酒の景色とた  
ひやらまを花に漕出（七）し小艇（八）とはほけゆれど（九）こころに心  
と身も（一〇）こころありきて（一一）五文字（一二）はいま（一三）とてれい（一四）遊櫻木深き所

に分りて停雲岡に登ゆ

朝上停雲岡雲在花深處暮下停雲岡花深處未去

士朗

と兄（一）とて又大鶴菴竹有とて俳諧師に御座拜見とゆ（二）移しけ  
まは御供（三）け（四）小ありて

うつたうの花に身をかせたふりぬ

ヤヤゆけより（一）其御園（二）ハこころを廢れたりと（三）ハハ今  
に佛残りて（四）ハ殊勝（五）な為雅也

東序端 東の方の御郭（一）外もて數町南乃方を武平町とてハ是より東の  
方東西一里南北半里余大小の武士屋鋪よてたまさ（二）こころハハ高の家  
並寺社等も交まらむ（三）乃那古野山の裾にて今と山口と呼し其廣  
き事名高き碁盤割に數倍也

坊（一）坂 長久寺横町より中杉の方へ出内道にあり竹腰家の下屋鋪と  
藏王の森との間と切通（二）ハオモ長坂ちり多く此大樹鬱（三）とて立こり

白昼といへどもいざくらを僅<sup>い</sup>の闇かれども左右前後人煙たえて物  
すけましく深山乃嶮路の如く深夜に幼児乃様しくまゆ妖物出<sup>あや</sup>る  
ふこれ俗説なりてむしう坊の坂と云はれり厄の坂も此西  
向の方にありて女児の形乃化物出<sup>あや</sup>る坊の坂厄の坂と一對にい  
ひはれりなり孫州雜志にハ此二坂をむしう片山神社盛なり一時  
乃男坂女坂也といへり

天道社 大曾根八幡宮乃西にありて大日靈貴尊の祭内末社鹿島香  
取社月神八幡社稻荷社加良須社惠比須社天満天神社ホあり皆  
日神乃御由緒は神なり例祭九月十四日十五日  
相應寺洪鐘の銘 名所圖會にもらてり今羅山文集によりて補ふ

尾州相應寺鐘銘

尾州愛智郡寶龜山相應寺者從二品兼相源敬公奉為顯妣大夫人所統  
堂建也新鑄華鐘以祭之樓其慎終永念之孝至矣於是奉命謹為之銘

銘曰

尾陽城東相應紂宮三寶垂教一差達聽萬声不盡免氏有功長樂花  
外天竺月中柔域告曉蓮社傳風千歲遺響惟孝無窮

寛永二十年九月十六日

因に云建中寺の鐘と羅山先生此銘文より雅趣此鐘と一對の如くと  
てしや 志は先年曉失せし誠は惜む事なり

歌塚

建中寺此境内にあり土御門兵部卿正二位泰邦卿の息女忠姫<sup>信</sup>  
子江戸御館及び大塚御殿に宮仕へ上臈藤町とのと称へ退隱乃後名  
古屋御下屋鋪に住へ剃髪て映珠院と号ひ英才拔羣酒と好み和歌  
とよくいひ侍時の狂歌

世の中におわりまらふ時うらみなくまはるる

其氣象かくれ如く文政十年四月廿日七十四歳よて死去西掛町に葬  
内和歌乃詠草歌帖ありといへども秘して人に足はる事なり没後遺



東序端の邊



一六十一



小より詠草とてに埋て一堆の塚とす世人是を歌塚と稱せり

村州月ぬしやの里へ玄明て意山いけふ林の夜の月

あけ候花も霞のまよりなれくとも春ふれてぞく涼

ほく花も霞のまよりなれくとも春ふれてぞく涼

其風調大概うけれ如くちま

九十軒町 新町の東にけりき也来船人陳元賛号と菊秀軒射し呼九十

中九十の當町に住して寛文十一年死去は彼一寓居とてたりし其

名残を失くして其頃迄新町東の切といひと九十軒町と改り

とと名所圖會に元賛の傳とて置げれ也来朝九十と云ふなり年月

と志向九十もり且又画中士客兩人の了九十の了なりと云ふなり

誤り時代にたへり故に少くこれに補ふもとり投化して長寄

に居り多し唐人等慶長の末頃より志向九十悪業と云ふ

元和五年海賊九十なり日本の衣服刀劔と帯一人の姿とちり教船

と洋海に乘出九十福建より日本九十來向商船と掠り物と盗み奪ひ取

事甚し福建迷惑九十浙江省の導きとて書檄と日本に上り上て其惡

事と止む事と訴し同七年其訴状使に明國の人單鳳翔と云ふ者來

りて風翔詩文に疎り陳元賛沈茂人二人の學者附添九十來

り訴訟九十てて風翔等帰國せり元賛ハ皇國にとまり

當國祖賢君の名に應り奉りて名古屋に移住せり也其時羅山先生

乃贈答の詩文りり羅山文集に答大明人單鳳翔代元和七年云云頃年我西

鄙貪賈屢侵掠海上福建道都督使單鳳翔來訴之云云と兄之同詩集に

和大明人陳元賛詩并序

辛酉春大明國浙江道奉檄使單鳳翔來於浴舍於板倉伊州太守及防

州太守許而相逢蓋己未年西州所在投化唐人假高人名而出海上帶

日本刀劔着日本衣服掠盜自福建來日本之高船而後又為商人輓而

歸於日本此事福建檄浙江浙江以聞因是告於日本云三月十三日余

赴戸田為春閣与明使晤語終日風翔雖粗知字不能詩其下陳元賛作  
詩呈余余即和答之  
林道春

揮筆虹蜺影有華使臣今日詠皇華心知不隔語言異四海弟兄同一家

と志はより元賛明清の乱をよみて投化せよといふ説は誤りなり也  
去よりハ數十年前に舶來セリ人なり因に云兼穂録に尾列うて  
より起心といふと志はよりハ附會の說なり易林節用集に卷頤の  
ゆへいんといふと附より愛長日前よりハ葉子なり

小牧町仇討

元和元年大坂御退治御陣あり(本藩の士は軍功

を御せんさくつゞせられし時河地権内と同僚の魁首なりしとも

やまらちて矢場連の指物と城堀のうち一取落しそれを取ゆん

高替く猶豫也うち内藤左平深尾佐五右衛門等四五人に先を

けられし故彼等一列の御褒賞に預らざるは権内無念不快を

うさぐ取扱の執政某の朝臣とて恨をけふと剣へ左平佐五右

衛門雜言を吐きて権内指物落したりしを不覺のう嘲り罵

けれハ遺恨を呑みて双方中らひよつたり年経て寛永二年

十一月六日山下市正兵衛の頭ハ太郎石堂竹林柳田治左衛門内藤左平河

地権内深尾佐五右衛門相容うて寺部家の三ノ丸の第宅(茶室に招

うれ各一座して餐應に預り取扱河地と深尾や手水に立たふ前後

と事口論すうの大坂御陣甲乙の事とて引出てすとに及傷に

及ぶとて山下押鎮と其場と事とをなうり會席終り

各取扱と告げて立出たふ山下何もし伴ひ同道して御圍御門の内

なる父大和氏勝の屋鋪に歸り三士中直りの盃と取結びたれは向

後遺恨とてさく作留とて和解とて各礼謝して歸り追廻

馬場の邊りて又口論して起りたしに悪口雜言して落り終に剛

戰に及りて河地鎗とて向てむとて從者早速鞘を

抜得たりたれは力もて内藤と切結び斬りたるは石堂と

てより志付りんとて納めりて其うちに

陳元贊  
寗宅

元元唱  
和集曰  
余自萬  
治已亥  
李致  
政公尼  
列寗宅  
唱和通夕  
棕欄元贊  
早亦披簾時信  
兩臘猶揮筆暖



驅寒根莫不是  
允株鍾千手觀  
音幻化香  
和棕欄元贊  
破笠飄雨未  
乾脚長蕙短  
獨寒休為弊  
陰塵土若有狂  
雲拂月香



内藤切伏られて深手を負ひ無念也と自ら下りたり深尾心得  
ことと忽ち河地を殺害以内藤の帰宅の上相果つれば西士相討とも  
に存命せしむればちこちなく皆ともに家督を下され権録と拜領し  
深尾は助太刀のみぞ喧嘩の本主にあつたれば殊さら御構ひ  
其うち権内の嫡子河地藤左衛門同く弟十郎ハ父の仇深尾佐  
五右衛門と討果さん心す有といふも公裁を恐て時節と待  
年月を送る寛永十一年の冬本阿弥江戸より當府に来りハハ  
御城に召て御道其の目利と仰付らむ其序に在番の人々目利を頼  
みり深尾も又をけはんとて刀を先年権内に討留する大業物  
也廣言ち河地兄弟聞より今ハ然止らざらんといふ父の誓を破せ  
んと企てけり十一月廿四日弓鏃炮隊長深尾佐五右衛門東谷山御  
狩場へ出づる夜に入、小牧町筋を騎馬を帰りがたを御目代後  
河地藤左衛門同弟扈從後河地弥十郎急ひて待請、藤塚町と善

光寺筋との間より左右に頭を擧げて出でて佐五右衛門とて狭みて詞を  
うけ藤左衛門手鎗を馬上より深尾を突落つれば十郎ハ小長刀  
うて首を刎むる深尾は徒士者技速懸りたれども追散  
一城野山田金左衛門方へ引取り兄弟おくれ名古屋を立退き備前の  
岡山へ立越城主安の扶助を蒙り彼地に居住せり聞えけり佐五  
右衛門より子息深尾七郎兵衛當角と立去備前に至り河地兄弟と討果  
さむとゆひたれと岡山は老臣伊木氏兄弟に与力ハ嚴重に警固  
つれば深尾は本望と心得りしより紅葉集編年大事尾陽萬  
話等に足えり此仇討の事正徳六年秋行武家蔵收記に主筋にたれ  
祥景山普藏寺 鍋屋町裏にあり曹洞宗より万松寺の末寺なりや  
那古野村にありて万松寺は別院なりハ御城御營業にけき御深  
井丸乃西中下御堀なる地にころりたれハ昔地を賜りてころにう  
けれて中下御堀と御鷹部屋の南の方に御堀とせりハ大樹の古松  
ありハ文化四年八月廿五日大風に御堀へ倒れ込めりハ御取



新野 走御詩  
 念慈 念慈 念慈  
 念慈 念慈 念慈  
 念慈 念慈 念慈  
 念慈 念慈 念慈  
 大江正樹



小牧町仇討

一六六

もいになりて跡方らうなくハハ普藏寺の境内の松なりと云ふ寺ハ  
天文十六年の開基なり松ハ其以前より老樹なり實に四五百年に松乃  
とつて物すこきまて生じ茂り枝よれて御垣水にひこりあり古松ハ松乃  
を何枝より一丈くかんとよみたり一にたかきより今ハ五十年及びのむ  
なりて語を傳ふ  
入さしむんち

攝取山遍照院

同所にあり浄土宗京都智恵院の末寺なり此つて昔

人家もなかり一時僅なる地藏堂ありて定朝の作と云ひ傳へる  
其像と安置たり其堂守り念宗と云ふ僧圓基の上子なり

藩士青山孫次兵衛春勝菅谷次郎兵衛昌良等其遊戯として親  
みたり彼堂に行て遊びしゆの名作れ地藏と草堂に置るむ

事と云ひ思ひ元和七年青山氏國祖賢君に願ひ奉り此地を拜  
賜一寺と建立菅谷氏力を尽し堂守を管み念宗院と名け付た

りて延寶八年八月十五日今れ山号寺号に改む本堂に慈覺大師  
の作と云ひ傳へる阿孫院の像と安置彼地藏は古像ハ別の小堂

に安置せり

汐見山

同所南方高岳院の後園と云ふ達左舊記に高岳院の裏れ山

にのかり南と云れ熱田の沖足と云ふ故潮見山と云ふ今ハ南に諸  
木茂りてむす此棟に居たりハんび九尺中木のかまて云れ

寺如元尺の也過一年五月節夕前に寺僧の案内と得て數百歩登  
内谷も深く坂多く難所ありて木當路を行如絶頂に至りて平地

あり廻りに竹の欄干と付け人の落さ付やうに志つり此所ハ春秋に  
孫客と云ふ名高と云ふ町に此情暇下に見たり與つる事大

形なり御當地ハ小塚らき風景也乃道に稻荷の小社あり一  
名と云六乃宮ともいり如何と云れハ四百六十年の狐の住む故也

云い傳へるなり寺僧いり又青石乃古き石塔あり其石と云  
寺ハ其鳴鐘の事鐘の如く表れ墓所に有り諸方れ子供寄合

寄敷さいさういなどく餘りあり故に今ハ藪乃中に捨て  
りり予もたぢ人數なりと云はせり俗説にむす或士家乃内室

妖狐の念深く妻と護く夫

にうときも終に逃出せり。猶心よかり、びや、のりけん天也出り、帰りにけし時毎の如く酒をすりて出、るに、妻産す、一幼兒を、與真の如く事す、切殺しく、余り酒の肴よして出、り、夫、押天一、忽ち短刀を抜き、其妻と切殺し、けり、叔五郎寺たれば、高院に葬り、猶、又、常璠石塚に、其石を、切け、金糸を、穿て、事多、年へ、つても、わづらひ、切、り、盛りの、虚説、き、く、つ、は、に、足、ら、び、は、全、磐石の、一種、と、青石、う、り、作り、り、石塚、を、賴石、所、に、なかりや。じ

少子部連鈕鈎墓

高岳院前の武家屋鋪のうちには有り古來より小首

塚と喚ひなり、鈕鈎ハ天智天皇御宇尾張守御宇、當國に在て

天武天皇と大友皇子と御合戦の時天皇は御味方に参り、とい、りたる故、のりけん軍功を捨て自殺したり、此のりより葬りたり、といひ、つ、い、む、く、往、右、墳、墓、の、跡、な、り、き、年、代、久、く、経、り、

今ハ塚山の形も定らなく、是則尾張の國司より皇都より下り在國せし人、其姓名の六國史に、る、く、い、く、り、り、也、日本書紀の天武天皇元年近江の朝廷に亂を避けて天皇及び皇后大和より伊勢にあり、れて軍兵を催し美濃路より責登り、つ、し、條、に、天、皇、留、皇、后、而、入、不、破

此及郡家尾張國司守小子部連鈕鈎率二萬眾歸之天皇即美之令其軍塞處、道云云、中、是尾張國司守少子部連鈕鈎匿山自死之天皇曰鈕鈎有功者也無罪何自死其有隱謀歟と云々、り、此、邊、の、近、き、山、に、ら、れ

各自殺りて、な、し、、一、等、保、の、二、萬、山、村、隱、藏、す、り、其、者、の、作、り、す、は、大、友、尊、皇、實、記、と、い、ふ、物、に、鈕、鈎、計、墓、を、め、り、し、名、護、屋、願、谷、西、山、の、山、の、寺、に、伏、佛、と、て、歌、持、書、五、葉、を、捨、に、す、り、ま、り、

松竹山茶屋寺

禪寺、町、の、東、側、に、あり、曹、洞、宗、同、所、舎、榮、寺、の、末、寺、也、

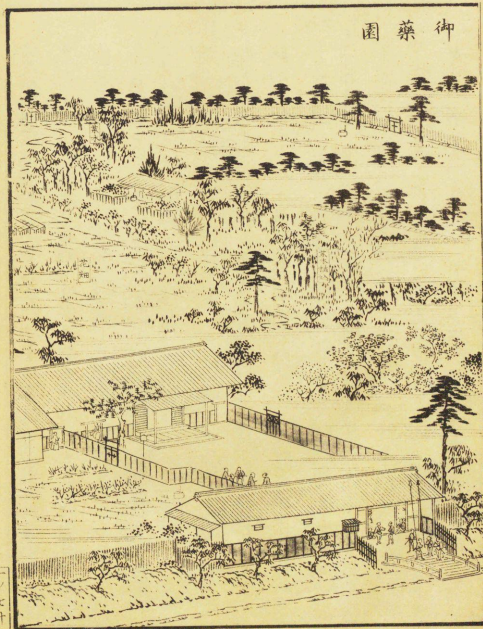
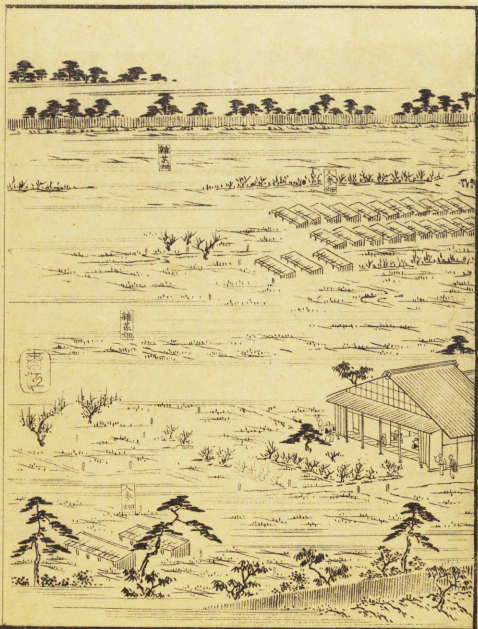
織田信長公より伯母君梅屋慶香大姉の菩提のために建立し、一光

和尚と開山と、清須に北市場にあり、一、以、慶、長、御、遷、骨、乃、後、に、、に、う、つ、ち、り信長公領知し、寄附あり、退、轉、し、て、合、ハ、寺、産、ち、

泉詠女神の堂

法華寺町森住山蓮勝寺の境内にあり、板、建、行、年、月、

定らなく縁日正五月の十八日に祭礼修行奉詣の人多し、て、賑、ハ、一、の、泉、詠、女、ハ、鬼、子、女、神、の、眷、屬、十、羅、刹、女、の、うち、第九番に當り、當、り、、女、り、、て、法、華、經、を、讀、誦、し、受、持、せ、ん、者、を、擁、護、し、其、惡、處、を、除、う、む、と





鬼子母及び十羅刹と共に佛の御前より誓言せしむ。法華經入  
陀羅尼品に又と拾芥抄よと十羅刹諸佛化云云九名尊諱文殊師利菩薩云  
云と云ふも蓮勝寺は日蓮宗京都本國寺に末寺なり

長壽山本住寺

同所にあり日蓮宗武藏國荏原郡池上村本門寺に  
末寺なり永祿三年同郡六郷の城主行方修理大夫創建して六郷

にあり。連年兵亂に堂宇荒廢したるを當國の士加藤某清

須にうけく再興せしを寛永六年令に地にうつ。寛文六年十一月

廿一日尾張美濃池上流の惣録司となり。僧録司蘭溪院日真

大師墓石川伊賀守共の女邊蓮藤三郎  
長綱の室備中守基綱の母なり

兼應二年五月五日駿河町乃米屋傳助とよ者節々の礼と町内を

廻りて父にう。詔より平岡弥右衛門同門十郎と名乗りて父の

敵上原喜太夫勝負くとつひに傳助驚き本住寺へ逃込けり

と兄弟の士追付て庫裡の前より討留され寺内甚騷動は其近所

に住居の小役人駈付次第を尋ねられ我々の江戸の御徒士役平岡  
権兵衛の畔同苗孫右衛門十郎と申兄弟也先年同地乃士上原喜太  
夫我々の父権兵衛と討て立退り故公義へ申達し仇討の御免許を  
得て諸國を巡り去年六月より御當地に忍びて相尋候儀今日見當  
り。故町人になり下りゆとも又ゆりてつち果一本望と違へ  
さるべく懐中より御免許の證狀と取出し兄を召れ小役人其趣  
を申達し御構これなきうとて二人は東都へ帰りけり

紅葉集に云ふ

賢隆山久遠寺

同町の南にあり高田宗と伊勢國專修寺に直末寺

なり。伊勢の長島にあり。福島宰相正則朝臣に便り清須の

御城下に移住しと願ひされ正則許容りて便利に此地

を見立てうつしと申されり板城北朝日郷のうちを見立天  
正元年に引移り正則の言葉によりて久遠山見立寺と名づけり



大黒舞  
中古乃躰



慶長十五年こに移し見立の文字を改ら宝暦十一年九月四日山

号寺号を轉倒して今の如く改む江戸四谷新富の大栄寺ハリセ僅に

内藤大和守重頼朝臣拜領あり一時番主の借に若干の地をとりて寺に取立

り申され其地のいん應りたる僧悦びてたゞり也といひて重頼より

前へば左なり其言未だ寺号を申されしを重頼山大栄寺といひ

改らるて永世に流るる事なり

御薬園 駿河町北なる御別荘にありて江戸大塚の御茶園に

髻髷より享保二十知年秋よりめて朝鮮人參利種井に甲州甘州を

開東より御料領りせしをに前裁し後より文化二丑年より淺

井氏正字乃御預りとなり平之丞董太郎引きされを司り本草

家功者の士数人及び下役の者二十余人附屬し培藝多しけり

近年人參格別繁茂し且又天保年中より粧粉製作始り

源順賢君度み成らるるれ薬園御覽遊ひされり諸薬草を以て

一七十三

大黒舞 駿河町の東なる物貫ひとも正月よりわたり四人組合

いひやうくしに歌をうたひ三味線胡弓小鼓等にのほせらる

人形をゆり或は十歳以下の子に衣裳を飾り扇を執踊らせ人家

乃前に立て物を貰ひりり其唱歌のいひしに必福大黒足ふらや

うたふ故是と大黒まひといひたる故りや江戸萬歳といひり

近年八村の番人とも工夫してわたり其唱歌をけりり

連ぬ米錢といひりりりて駿河町東より出たはりり

江戸にハハハりり他國も有る事希なり大黒舞ハハハ

き物として季瓊日録に文正元丙戌閏二月十七日成知客在浦上美作寺

所談餘以海苔一葉使石阿拓贈之其題目書曰大唐白樂天成知客云

報之薬花一枚曰天竺迦葉尊者贈大黒云以爲一笑也彼成知客平日好

大黒舞仍如此也といひ御湯のりりりの日記に天文十五年三月

九日ちむんりりりり御中のしんりりりり申すこと

高天くまひりて西にせしれ、御さうけき七こんまひりんせ  
き御所くちふたふとこふちふとこふちのち、こんはわりあくたが  
くつとくちおんしんはしんはたをまひりてあうくせしれ  
中子<sup>ちこ</sup>のちふぶさ

功徳山園教寺 東田町にあり、天台宗にて野田村密藏院の末寺なり

白山玄海寺といひ、貞享二年今の山号寺号に改む本尊千  
一面觀世音越天徳泰澄大師所作の美佛なり、ゆゑ其ゆりて白  
山権現社とてに勧請して則ちの社僧をばくむ玄海といひ、  
住僧の名なり、とを白山の事ハ名所圖會にあり置たり合せたり  
乃、境内なる里堡の跡ハ慶長十七年壬子の春駿府より當府一往  
來便利のせら岡崎より名古屋ハ此道を開き平針村堤村ホに  
傳馬といひけ置たり、これを駿河海道駿河町なせしむりし  
其時築置たり、一里塚の廢まじりたり、此道今も往來絶は

一て峯母海道といへ

寶池山光蓮寺 駿河町にあり東本願寺の直末にて内陣一家なり

佐々木三郎盛綱の子息木村源三成綱入道寶池房慶園の開基天福元年九月

の建立、光蓮院寶蓮寺と号し、近江國伊香郡谷口郷にあり、

中年三河國に引移り和田郷乙川郷等に居住り天正兵乱り後當國前

田村に退去し御一統のち當地にうけんて先祖より此由緒とも

首佐、木對馬守氏信法名道善同佐渡守滿信法名道加同佐渡判官宗氏法名賢敏

黒田備前介宗滿法名道法小寺下野守重隆法名宗同美濃守職隆法名宗國以上

六基の古位牌と當寺に安置は是則筑前侯の御先祖なる故彼神

家より節々御音信りて當寺に榮へ、本尊阿弥陀如来ハ

弘法大師の真作なり、寺宝佐々木家黒田家先祖の人なる遺物

此画像書札等多く其餘古器雅品すくなく、  
七曲街 武平町乃南の方より東にせし將監屋鋪と經て西新町へ出



公道といふ幾度も聞たりて西より東に通ひ故りく名づく西側  
 武士屋鋪の高塚りくひに藪垣等茂り塞り白登りと人語り声と聞  
 り往來人稀なりと夜中はいとさきとて西たり又伏見町は南より  
 天道町の方へ出得道とてや同く様たるゆゑ七曲りといふ清  
 少納言の枕草子清輔朝臣の袋草子もたんとて七曲りといふ曲まひ  
 玉に七曲り曲曲てなるとはちといひ七曲りの数なりなりといふ曲れ  
 る故りく名つけたり 九段半金華山古塚の七曲りといふ同  
 地名諸國に多し深定信君の園の秋風  
隨筆に陸奥白川の城下の東小田村のふたり七曲りといふ坂に鬼の土居り  
 出たりといふ事あり又ともちのふたり七曲りといふ者あり又又又又  
 といふ人といふなりを其つとて毛もといふ又定り鬼の形といひ或も  
 也とも風説といふたり夜日の久人鏡丸とてお留りといふに興さ  
 なく吟半たり其地にてはんちんをていふ説ありていふ如く何  
 回も七曲りといふ地は秋夜のおふねといふ夜中といふ如く何  
 回も七曲りといふ地勢の七曲りといふ其名もいふりといふ婦人  
 見重といふといふ怪談のひと怖がりて夜分の通行せし  
 辨財天社 矢場町にあり如良須神及び天照大神と相殿に祀り葉栗  
 郡川島神社天文十九年の兵乱に衰微し其後洪水に埋没して僅

に形計 残りより中島郡一宮村にうつりてまつり置りと  
 寛延四年四月より遷座り いソの傳り末社に稲荷社八  
 玉子社にり例祭は三月十五日にり  
 操芝居 橋町裏町にあり尾陽戲場事始り物に寛文五年己巳の  
 秋橋町裏町にて狂言物真似具行に大夫松本名左衛門大夫玉川千之  
 丞河内より久しく致し申はく土居せり 名松本千之丞は名高き男  
 等取十部の俗書及び  
 俳諧の古書に及り  
 といふこと三浦陰見洲名語圖  
 大根一名尾張に此國よりて初はむいやく清須の城下隆なる時部  
 方より於國といふいふいせ山玉のりてきて來て芝居とまつりとい  
 やく子となりといふ事をせり乃ち清須の孫兵衛といふといふ  
 ろやつりに中下の次右衛門歌舞妓狂言をいふといふといふ  
 又名古屋よりて飛騨屋町と云所に舞操其外は備くの戲男といふ  
 集りてのり事なり事尽りに諸人歩とてい野せり合ふ

合喧嘩口論 出 或、遊君に戯も家職と失ひ身と廢は是民又  
妨げ也とて上りの停止せしむ云云と云へり此時志しく中絶  
寛文に再興すべかり



A294



一七十七

昭和九年九月十五日印刷  
昭和九年九月二十日發行  
東京 三三三  
印刷所 中央印刷局  
發行所 中央印刷局  
印刷者 中央印刷局

愛知 県



1103263663

294

才

1A-3-1